

大飯原発差止訴訟・原告団の12名による 福島交流ツアーの報告

2013年11月26～27日



▲津波被害から再建された相馬市松川浦のホテル前にて。
左端は案内していただいた福島の方。

もくじ

■ まえがき	2
■ 福島交流ツアーの概略	4
■ 参加した12名の感想	15
■ 福島県南相馬市・相馬市及びその周辺地域における 空間線量測定	32
■ 大飯原発差止訴訟の原告募集	45
■ 大飯原発差止訴訟 原告団 結成のアピール	48

■まえがき

大飯原発差止訴訟 原告団長 竹本修三

2013年9月14日、京都弁護士会館で開催された「9・14 原発ゼロをめざす学習会」で、福島原発事故訴訟（生業訴訟）原告団長の中島 孝さんによる「福島第一原発事故の実相と実態、被害の実態に学ぶ」という講演があった。実際に被害をこうむった当事者の生々しい報告には迫力があり、それを聞いた私はいたく感動した。学習会のあと、中島団長と親しく話をして、福島生業訴訟原告団と大飯原発差止訴訟京都原告団との連帯を強めていこうと約して別れた。

翌週、私は中島さんにメールを送り 2つの原告団の交流会と福島県相双地区の被害状況の視察を兼ねて、京都の原告団有志で相双地区を訪問したいが受け入れてもらえるだろうかと打診した。早速中島さんから「相馬地方を視察したいとの由、ぜひお時間をおつくりいただきたいと存じます。当地の原告団メンバーで、ガイドをする仕組みもできております。現地との交流も兼ね、お話を伺いたいと楽しみにしております」という返信メールが届いた。さらに10月17日に中島さんから届いたメールには、「11月26日（火）、27日（水）であれば、地元の受け入れの体制として一番都合がよいです。『相馬新地、原発事故の全面賠償をさせる会』の事務局長の村松孝一さんという方が、大型の免許を持っており、マイクロバスのレンタカーで強制避難区域等を案内できます。また、26日夜の宿泊・交流会の場所は、相馬市の松川浦にあるホテル『みなとや』が最適でしょう」と書かれていた。

そこで、京都訴訟原告団の吉田明生事務局長と相談した結果、11月25日（月）の夜行高速バスで京都から福島に向かい、26日（火）の朝に福島駅に着いてから路線バスで原ノ町駅まで行き、現地の世話人と合流してマイクロバスで相双地区の被害状況を案内してもらったあとで、夜は松川浦のホテルで福島生業訴訟原告団との交流会。27日（水）は引き続き、被害状況を案内してもらってから福島駅から夜行高速バスで京都に向かい、28日（木）の朝に京都に帰着、という1泊4日（往復車中泊）という強行軍の「弾丸ツアー」を計画した。この計画を京都訴訟原告団のメーリング・リストに流したところ、12名の参加希望者があった。

参加メンバー表を中島さんにメールでお送りしたところ、返信メールに中島さんは生業で忙しく、「被災地フクシマの旅」実行委員会代表の新妻慎一さんに詳細なスケジュールを組むように依頼したので、ツアーの詳細は新妻さんと連絡を取り合うように、との指示があった。そこで、新妻慎一さんと吉田明生さんの間でツアーの細部を詰めて、ようやくこのツアーが実現した。ツアーの概略については、次の吉田さんの報告に書かれている。

■^{なりわい}福島生業訴訟（福島原発訴訟）…「生業を返せ、地域を返せ！」福島原発訴訟。東京電力福島第一原発事故の被災者たちが国と東京電力を相手取り、原状回復と慰謝料一人当たり月額5万円を求めて2013年3月、福島地裁に起こした裁判。第一次原告は、800名。9月10日の第二次提訴の原告は、1159人。合わせて2000人近くと、全国で最大クラスの原告団を有する訴訟となっている。

原告団・弁護団は同訴訟の意義として、▽東電だけでなく国の責任を明らかにすることを通じて被害者の諸要求を制度化させ、原告にとどまらない全体救済をめざす▽全国原発差止訴訟や「原発ゼロ」の取り組みと連帯する一ことを強調しています。

原告団長の中島孝さん（下の写真、横断幕を持つ最前列の左から3人目）は、地元の魚屋、仕出し屋の「中島ストア」を経営されています。



（▲『生業を返せ、地域を返せ！』福島原発訴訟原告団・弁護団のWebより）

■^{そうそう}相双地区…福島県の太平洋側、浜通りの北部で、^{そうま}相馬地区と^{ふたば}双葉郡の総称。相馬地区は、相馬市、南相馬市、相馬郡（^{しんちまち}新地町、^{いいたてむら}飯舘村）からなる。双葉郡は、福島第一原発のある^{おおくままち}大熊町と^{ふたばまち}双葉町、福島第二原発が立地する^{ならはまち}檜葉町と^{とみおかまち}富岡町のほか、^{なみえまち}浪江町、^{ひろのまち}広野町、^{かわうちむら}川内村、^{かつらおむら}葛尾村の8町村からなる。【地図→p.14】

■「9・14 原発ゼロをめざす学習会」…主催したのは、「原発ゼロをめざす京都ネットワーク」（ゼロネット）。原発ゼロをめざしてネットワークをつくり、連携を強め、活動強化をはかろうとする目的で、2012年7月に結成。世話人団体は、以下の通り。京都地方労働組合総評議会（京都総評、連絡先）、自由法曹団京都支部、京都府商工団体連合会、日本科学者会議京都支部、京都母親連絡会、新日本婦人の会京都府本部、京都民主医療機関連合会。

なお、京都には、脱原発を願う個人や団体のゆるやかな情報ネットワークとして、「バイバイ原発・京都」もあり、やはりこの学習交流会へ参加を呼びかけていた。いわば、全京都注目の集会であった。

2013年9月15日は、民主党政権の下で再稼働した大飯原発が停止し、再び日本全体で原発ゼロになる日であり、この前後には脱原発の取り組みがとくに高まった。

■福島交流ツアーの概略

大飯原発差止訴訟 原告団 事務局長 吉田明生

[1] ツアーのガイドブック

今回のツアーは、「福島をの悲しみを知ってください。原発被災地を歩くガイドブック」(B5版 20ページ)、『相馬新地、原発事故の全面賠償をさせる会』発行)をもとに、二人の方に丁寧に案内していただきました。感謝してご紹介します。

・新妻慎一さん。

二日間、全般的な案内をしていただきました。「被災地フクシマの旅」実行委員会代表。名刺には「原発被災地に来て、見て、聞いて、原発を考えてみませんか。お世話をさせていただきます。」とある。元高校の日本史の先生。【→p.12 左下写真】

・村松孝一さん。

二日間、大型の15人乗りレンタカーを運転しながら、案内していただきました。『相馬新地、原発事故の全面賠償をさせる会』事務局長。この「会」は福島生業訴訟(福島原発訴訟)の原告の会ではないが、協力関係にある。元JR労働者で、右ガイドブックのイラストレーターでもある。

【→表紙写真の左端】



[2] 現地に着くまで

11月25日(月)…参加した原告は全部で12名であったが、うち10名は夜行の高速バスで、京都(うち1名は大阪)より出発した。京都駅八条口21:53発の福島行き高速バスで出発(車中泊)。

しかし、東名高速などでの事故のため、コースが中央自動車道経由に変更になった。このため、福島到着時刻に遅れが出るようになった。

11月26日(火)…高速バスは福島駅東口着 08:24 の予定であったが、1時間ほど遅れそうになったので、バスの乗組員に相談した。その結果、急遽、郡山駅でバスを下車することにし、あたふたと新幹線に乗り換えた。10人分の切符を買い、新幹線ホームへ入って、ホッとす。新幹線は、予定通り福島駅に08:36着。福島駅で、さいたま市、須賀川市から参加の原告と合流して、12名が揃った。お互いに初対面が多い。



(▲新幹線乗車の記念の乗車券と特急券。竹本団長)

朝食の間もほとんどなく、福島駅西口発 09:00 の路線バスで JR 常磐線原ノ町駅前へ向かう。途中、道の駅「川俣」で休憩。



(▲ようやく着いた JR 原ノ町駅前での記念撮影)

11:00、原ノ町駅前に到着し、福島生業訴訟の原告団の方々と合流した。記念撮影。

レンタカーに乗せてもらい、11:25 頃に南相馬市・原町区の道の駅「南相馬」に着く。早めの昼食をとって、ようやく一息ついた。

[3] 南相馬市の^{おだか}小高区など

(1) 12時すぎ、南相馬市・小高区(避難指示解除準備区域)へ。志賀勝明さん(相馬双葉漁業協同組合^{うげど}請戸ホッキ会の会長)に、被災した自宅など、海岸近くを案内してもらう。



(▲右手前が志賀さん。向こう側が被災したご自宅だが、まだ新築の感じ。土台を1mくらい高くしてあったためか、流されなかった。津波は、1階の中央位まで達したとのこと。ガラス戸に、津波が来た高さまで汚れが残っていた。周辺の家々は流されてなくなった)

志賀さんは、浪江町でホッキ貝の漁をしつつ、40年前から原発反対運動にとりくんできた。漁協青年部から除名されるなど、強い風当たりをうけながら、闘う。最近、東北電力が画策していた「浪江・小高原発」建設計画を断念させた（2013年3月関係自治体が反対を決定）。



（▲志賀さんの家の近くの海岸、堤防が壊れている。堤防の向こうが、すぐ海）



（▲このすぐ右側が海。左方の家々は流失）

（▲墓石だけ集めた臨時の墓地）

(2) 続いて、吉澤正巳さんの「希望の牧場」を訪れて、訴えを聞く。晴れていたが、風が強かった。道端の牛の糞の上で、放射線量が5マイクロシーベルト/時（5×24時間×365日＝44ミリシーベルト/年）をこえ、この日に訪れた場所では最高の線量値を記録した。



（▲「希望の牧場」のパフレット）

吉澤さんは、国の殺処分指示に抗して 350 頭の放射能汚染牛を飼育している。粗飼料は、汚染された稲わらをもらってきて使用しているとのこと。なお、インターネットで「希望の牧場」と検索すると、牧場の実際の様子を見ることができる。



(▲広大な「希望の牧場」の牛と、なだらかな阿武隈高地の山並み)

(3) 午後 2 時頃、南相馬市小高区の市街地にはいる。

- ・鈴木安蔵^{やすぞう}の生家…鈴木安蔵は 2007 年の映画『日本の青空』のモデルで、戦後に憲法草案を提案した憲法学者。治安維持法違反第一号としても知られる。地震で壊れた生家は、ある程度片付けられていた。
- ・商店街…地震の被害を受けたまま放置された店がある。家具店の中は、家具が倒れたまま。ただ、地元の信用金庫は営業していた。「営業中 おかえりなさい！」と書いてあるのが、かえって誰も帰っていないことを物語るかのようだった（復興の印ということで、形だけの営業か?）。ひなびた町並に、人通りは見られない。時間が止まっている。
- ・JR 常磐線小高駅…駅は休止中。駅前の置き去りにされた通学自転車置き場を見る。あの日のままになっているはずだが、“震災ボランティア”の手で清掃、整備されたようだとのこと。

(▼倒れたままの家具が散乱する家具店)



(▼あぶくま信用金庫小高支店)



(▼未だに片付けられない地震のあと)

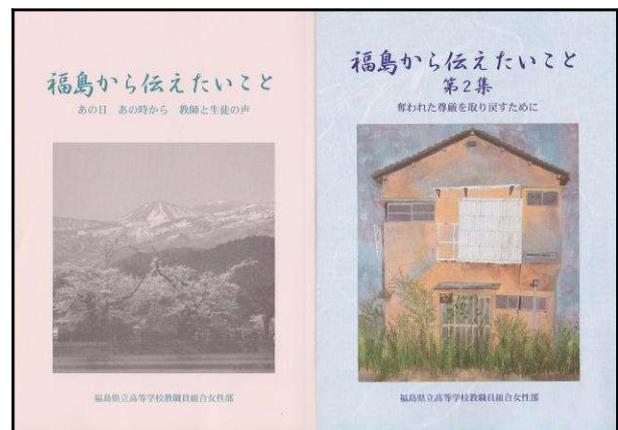


(▼人通りのない大通り)



(4) 県立原町高校の近くの駐車場で待ち合わせて、福島県高教組（福島県立高等学校教職員組合）、女性部長の大貫昭子さんから、震災と小中高校生の生活、学校の変化などの話を聞く。

『福島から伝えたいこと』（第1集、第2集）という冊子に、教師、生徒、保護者などの生の声がまとめられている。



(5) ^{なみ え まち}浪江町（避難指示解除準備区域）への見学は、名簿を提出して事前申込をしてもらっていたが、許可が出なかった。町が町内への立ち入りを禁止して、民間業者に警備を委託、道路を封鎖している。

■**避難指示解除準備区域**…放射線の年間積算線量が 20 ミリシーベルト以下となるとされた地域。2012 年 4 月 1 日から「避難区域」が再編されて、設定された。当面の間、引き続き避難指示が継続されるので、昼間の立ち入りはできるが、そこでの生活はできない。「復旧・復興のための支援策を迅速に実施し、住民が帰還できるよう環境整備を目指す」ことになっている。住民は区域内へ夜間を除いて出入りすることができ、昼間に製造業などの事業を再開することもできる。【地図→p.14】

■**浪江町立ち入り申請**…浪江町は今年の 4 月に一部立ち入り自由になった町で、原発の排気筒などが見えるとのこと。この町は防犯上、町独自に警備を行い、車両チェックをしている。したがって、立ち入りを申請して許可を得なければならない。以前はゆるやかであったが、最近は厳しくなったとのこと。

そこで、予め申請して許可を得るため、「被災地フクシマの旅」実行委員会の方で申請を代行してもらった。申請に必要なデータは、参加者の名前と個々の方の携帯番号（緊急時連絡先）、立ち入り車両の車体番号。しかし結局、許可されなかった。なお、浪江町の「希望の牧場」は南相馬市に接するので、そちらから訪問することができた。

[4] 宿泊のホテルにて

(1) 午後 4 時すぎ、相馬市の松川浦「ホテルみなとや」(Tel.0244-38-8115)に着き、休憩。すぐ海に面したホテルで、津波の被害は大きかったが、再建。1泊2食付き(2食とも豪華)で、8400円。松川浦は、砂州に囲まれた海を中心にした風光明媚な海岸であったが、東日本大震災と津波で壊滅的な被害。

(2) 5時から、福島生業訴訟・原告団の原告(7名)との交流会議。



(▲福島生業訴訟の原告の方々)

(◀交流会議で自己紹介など)

(3) その後、食事をしながらの交流。地元漁民の「のりこ」(乗組員)の婦人3名も参加。水産物の放射能汚染などについても意見交換。

(▶全員で記念撮影)



(▼11月27日の朝、「ホテルみなとや」の全景。左側はすぐ海で漁船が繫留)



(▲ホテル前で壊れた船の撤去作業)

[5] 相馬市へ

(1) 11月27日(水)は、相馬市、飯館村へ行く予定で、まず、相馬市から。9時、中島孝さん(福島生業訴訟の原告団長)のガイドで、相馬市の漁港を見学。漁港と市場は地震と津波でほとんど破壊された。市場の建物は1棟だけ残っていた。その先では現在、「なまこ壁」(壁の平瓦の目地に漆喰を盛り上げて塗る土蔵などの様式)のかなり大きな漁具置き場が何棟も建設されていた。漁具置き場としては、少し立派すぎる印象。



(▲建設中の漁具置き場が何棟も見える。
車中より)

(2) 港を訪れたときは、たまたま、小型漁船がワタリガニなどの水揚げをしていた。しかし、浅海の水産物は放射能汚染のために流通には回されないで、漁民が持ち帰るとのこと。底引き漁船の方は、週に一回だけ、試験操業として出漁し、水産物は流通する(ただし、一部は放射線検査にまわされる)。



(▶水揚げされたワタリガニなど)

(3) 10時半から11時半にかけて、相馬市大野台にある仮設住宅へ。広い工業団地の中に、避難元の地域ごとに別れて仮設住宅が集中していた。飯館村から避難している佐藤襄二さん(自治会長)から、仮設住宅の暮らしや、補償金をめぐる問題などの話を聞く。佐藤さんの奥さんは、つい最近、亡くなったとのこと。話を聞くのがつらい。

(▼左端でこちら向きが佐藤さん)



(4) 11 時半、相馬市の「浜通り農民連」の事務所へ。農産物供給センター NPO 法人「野馬土」にて、農業の課題と取り組みを聞く。米の全量検査の様子を見学した。



(▶米袋に貼ってあるシールのQRコードを携帯電話などで読み取ると、インターネットに接続し、その米の識別番号、放射線量＝検出値未満、などが分かる)



(▲アームの付いた機械で米袋ごと持ち上げ、コンベアに載せて左奥の検査機をくぐらせる)

また、持ち込みの農産物の放射能検査も受け付けていて、検査室が設置されていた。



直売所では、放射能検査済みのバーコードが付いた米、野菜などを販売。その後、交流施設にて昼食。中島ストアの仕出し弁当をいただいた。

■野馬土…相馬市の浜通り農産物供給センター（浜通り農民連〔農民運動全国連絡会〕）に接してできた“ふれあい広場”。2012年12月設立。安心・安全を生産者から消費者の手へ渡せる直売所と、いろいろな人々が集える場所としてカフェなどを併設。

浜通り農民連のメンバーは、南相馬市小高区の方が多く、津波被害と原発事故のため、大きな被害を受けた。「またいつか自分の土地に帰ったとき、また農業をしたい」ということで、相馬の地で『野馬土』を始めることになったという。なお、今回お世話になった「被災地フクシマの旅」実行委員会の事務局も、ここにおかれている。



(5) 午後には、相馬市にある障がい者施設「ひまわりの家」を訪問。この施設を運営されている村松えみこさんから、震災などの避難所生活は、障がい者の健康を悪化させることなど、震災と障がい者の生活について、話を聞く。

現在、知的障がい者のグループホームを9軒、運営。認知症のグループホームと異なり、知的障がい者のグループホームには、政府などの補助がないとこのことを初めて聞く。障がい者の健康と生活のために奮闘中の様子がわかった。

(▶「ひまわりの家」の案内パンフレット)



いいいてむら
[6] 飯館村へ

(1) その後、全村避難中の飯館村へ。飯館村は「日本で最も美しい村連合」に加入する自然に恵まれた村。しかし、現在はほとんどが居住制限区域（年間20～50ミリシーベルト）。ただし、特別養護老人ホームと、避難を拒否している一部住民は居住している。飯館村役場、全村避難の日以来子どもが来ない小学校、帰還困難地域（同50ミリシーベルト超）で立ち入り禁止の長泥地区の入口などの案内は、渡辺勝義さん（相双地方労働組合総連合 [相双地労連] の事務局長）。

(▼飯館村役場前。ただし、役場機能は、現在福島市内に移転している。左はガイド役の新妻さん)



(▼役場前の線量計。電光掲示は上の段が小数点以上、下の段が小数点以下を示す。0.50マイクロシーベルト/時)



(2) 長泥地区への入り口では、落ち葉のたまった地面で（空間線量ではない）、11 マイクロシーベルト/時（11 × 24 時間 × 365 日 = 96 ミリシーベルト/年）を超える高線量を記録。京都から持っていった線量計では、計測限界を超えた。道路を封鎖したところでは、若い人が監視で働いていた。

（▶封鎖されている長泥地区の入口）



（▲行き止まり。ガードマンが警備）



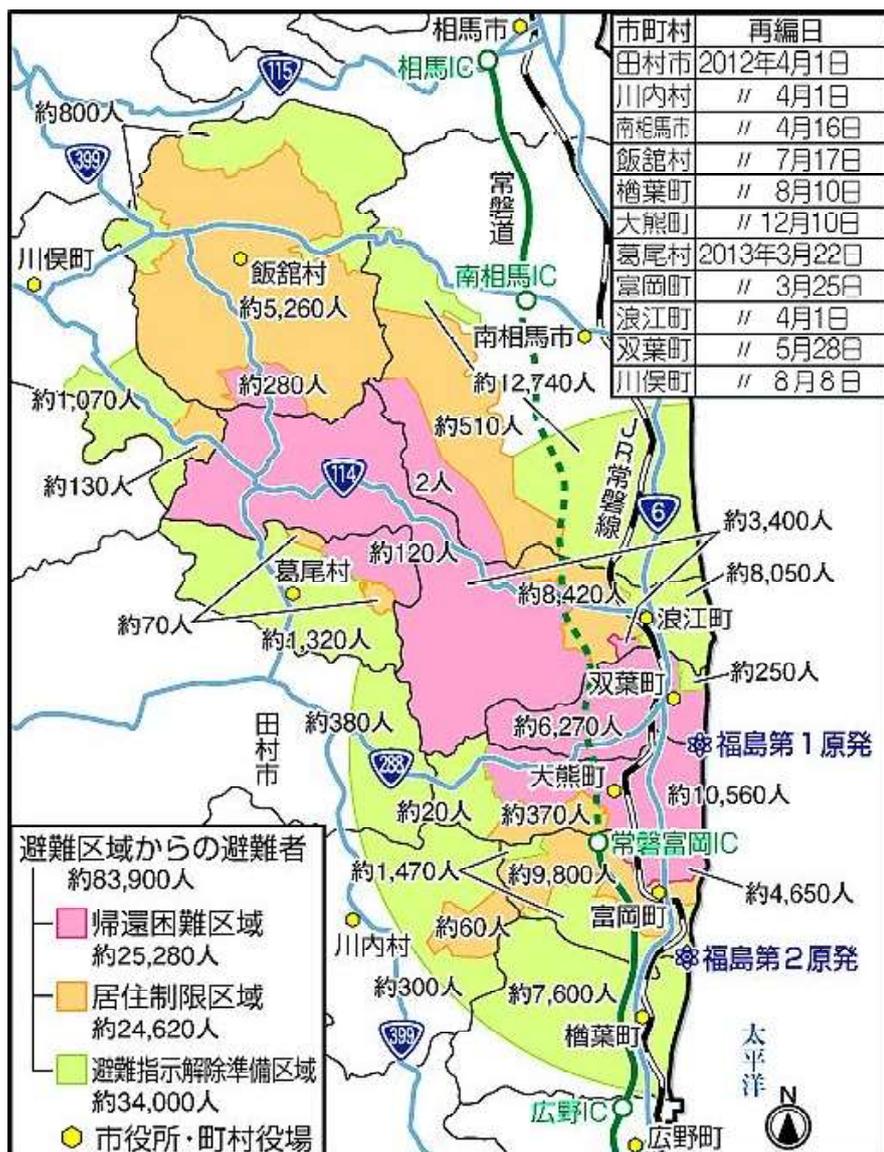
（▲左：京都から持参の線量計は 9999 を表示。
右：地元の渡辺さんの線量計は 11.59）

■**日本で最も美しい村連合**…いわゆる平成の大合併として市町村合併が促進され、小さくても素晴らしい地域資源や美しい景観を持つ村の存続が難しくなって来た時期（2005 年）に結成された NPO 法人。失ったら二度と取り戻せない日本の農山漁村の景観・文化を守りつつ、最も美しい村としての自立を目指す運動を進めている。

■**居住制限区域**…放射線の年間積算線量が 20 ミリシーベルトを超えるおそれがあり（年間 20 ミリシーベルト超～ 50 ミリシーベルト以下）、引き続き避難の継続を求める地域。2012 年 4 月 1 日から「避難区域」が再編されて、設定された。「除染を計画的に実施して、基盤施設を復旧し、地域社会の再建を目指す」とされている。住民は区域内へ夜間を除いて出入りすることができる。【地図→p.14】

■**帰還困難区域**…放射線の年間積算線量が 50 ミリシーベルトを超え、5 年間経過しても 20 ミリシーベルトを下回らないおそれのある地域。2012 年 4 月 1 日から「避難区域」の再編で設定された。一時帰宅などの出入りが制限されている。【地図→p.14】

[参考] 再編された避難区域 福島県内の「避難区域再編」(2012年4月1日から)



[2013年8月8日現在]

[福島民友新聞社の Web より]

みんゆう Net 避難区域再編・「帰還困難」「居住制限」「避難指示解除準備」区域

[7] 帰路

4時半、飯舘村を離れる。5時半頃、福島駅着。福島駅周辺で、12名揃って夕食をとった。ここで、報告集をつくろうという話が出る。夕食後、福島県や埼玉県から参加した2名と別れる。

京都や大阪方面の高速バス組10名は、20:00に福島駅東口発。車中泊。翌28日、京都駅八条口着06:10頃。帰りは事故もなく東名高速を通ってきたためか、予定の時間06:23より早く到着した。そして、9名解散。1名は大阪まで。

■参加した12名の感想

[1] 福島生業訴訟原告団との交流ツアー参加感想記…京都府京丹後市 山根 義夫

“カリカリ置場”って？

最初、福島でこの言葉を聞いて、「仮置場に行くまでの仮の置場の事です。」と聞くまでピンとこなかった。放射能汚染廃棄物の処分地が決まらないまま、仮置場への収容待ちのための“仮々置場”のことだとは！

後手後手で最近になって言い出した制御不可能大懸念の“地下水汚染”と共に、正に日本の原子力行政の実態を象徴する言葉だと思います。



(▲放射能測定装置。相馬市の『野馬土』にて)

原発事故以来、東電の欺瞞やマスコミ報道の不十分さを痛感して来ましたが、このツアーに参加して、放射能汚染避難地の荒廃ぶりや仮設住宅団地での諸問題、行政の補償金差別や諸対応貧困の問題などなど、想像外の実態を色々多々知りました。

除染は業者の儲けにはなっても、「“除染”ではなく“移染”に過ぎず」の声を聞いた事があり、現地状況を見て、さも有りなんと実感しました。

そして「行政は山林の除染はしないと決めている。」とも聞きました。ならば今後、セシウム等放射能の有る物質が、山林から流れ出て溝・水路・河川に濃縮され、流れ流れて河口に、そして塩分効果で沈殿し続けます。

原発爆発の後、何カ月後だったか、東京アスハルトジャングル故に早々と流れ来た東京湾江戸川河口の泥から、異常な量の放射線が観測されました。生物の食物連鎖がその濃縮を尚重ねます。だからかなりの地域の河口海産物も心配になります。その放射線軽減のため、溝・水路・河川・河口の除染も、山林の下流はアスハルトジャングルの下流の場合よりも遅れて、何十年間も除々染・除々々染と、回を重ねる事が必要になる可能性大と考えなきゃなりません。

“仮々置場”や“地下水汚染”が、もっと話題沸騰して『2013年の新語・流行語』に“じぇじぇじぇ”には及ばなくとも、本来なら上位ランクに有って当然の言葉です。

首相がオリンピック誘致の為に「地下水汚染は制御出来ている」と公言しましたが、実際は地下水汚染が制御できておらず、放射能汚染廃棄物（核のゴミ）の全てが、最終処分場も未だ無く過渡的で、制御出来て居るとは言えない状態なんですから、……。韓国が東北産海産物の輸入禁止を決めたと言うことは、事に困ったら、様々な放射能汚染とその対応策不十分を理由に、オリンピック開催国の再検討にさえ、なりかねない事態なんですから、……。

尚、“仮々置場”や“地下水汚染”等の言葉は『新語・流行語』を舞台に、政府やマスコミの発信する情報の、透明性の程度を図るバロメーターでもあると、僕は思います。

そして秘密保護法によって、これらの言葉さえ使えば罪に問われることに？治安維持法下での“反戦平和”や“生きて帰れ”の言葉だって弾圧されたんですから、・・・。

趣味にしている 川柳と狂歌ができました。

除々染で 仮々々の 置場要る
後手後手の 地下水汚染 止められず
五輪会場に タンク列の夢

[2] 原発被災地を訪ねて…兵庫県神戸市 前田 芳徳

福島駅から見える磐梯山は、雪をかぶっていた。東北の冬は早い。バスの中で地元の人が、「磐梯山のきのこも、ダメらしいよ」と言う。

原発から 50 km、全村避難にまで汚染された飯館村。今年の避難区域見直しで、唯一帰還困難区域として立ち入りが禁止されている長泥地区に向かう。山はクヌギが中心で、落葉真っ盛り。この自然は、縄文の原風景を想像させる。

長泥地区に続く道路に、通行止めのゲート。空は晴れ、晩秋の山が広がる。神戸の里山と変わらない。道路わきの落ち葉の上に線量計を置いてみる。11.46 マイクロシーベルト/時。年間放射線量に換算して、100.38 ミリシーベルト。とても人の立ち入れる場所ではない。



放射能には色も匂いも無い。線量計が無ければ全く分からない。しかし放射線は、無数に体を貫いて染色体を破壊して (▲飯館村の長泥の入口にて。11.46を表示) いる。放射能汚染の厄介さ、恐ろしさに気付かされた。

飯館村役場前の空間線量が 0.52 マイクロシーベルト/時。年間線量に換算して 4.55 ミリシーベルト。

長泥を除く飯館村は立ち入りは出来るが、住むことはできない。雑草に覆われた田畑が続き、見える家並みも人は住んでいない。立派な学校も現在廃校、校庭に草が生えている。穏やかな丘陵に広がる生活の後が、きれいな村だったことを教えてくれる。

村民の 60 %が、「戻らない」「戻りたくても戻れない」と答える。戻りたいのはほとんど 60 歳以上の老人。若者は帰らないとっている。放射能を考えれば、小さな子どもがいたら私もそうするだろう。

一度放射能に汚染されたら、村が元の姿に戻ることが如何に絶望的なことか。

仮設に避難している飯館村の人の話を聞いたが、現在も村民は先の見えない苦難の中に放り出されている。

このたびのツアーで、津波に襲われた南相馬市の浦尻、小高区、希望の牧場、ひまわりの家、仮設の避難所、農民連事務所を訪ね、現地の人のお話を聞くことが出来た。宿舎で開かれた「生業訴訟原告団」との交流を含め、多くの現地の人の声が聞けた。充実したツアーであった。準備して下さった「生業訴訟原告団」に感謝したい。

話の中で、金の力にゆらぐ人間の性、貧しさに付け込む変わらぬ権力者の手口、被災者間の軋轢など、生身の人間の現実と苦闘する生業原告団の報告があった。反原発の現地に共通の問題なのかと思う。

生業訴訟団の人々が元気で力強く、ハツラツとしておられるのに感銘を受けた。貧しさゆえ満蒙開拓団や出稼ぎを出してきた福島独特の、闘いの歴史でもあるのかと想像したほどだ。見習いたい。

生業原告団はガイドブックを作り、「福島を見に来て欲しい」と要請している。ただ、若い女性には呼びかけないという話であった。還暦を過ぎた私のようなものには、放射線の影響は少ない。中高年の皆さん、ぜひ福島を見に行ってください。お勧めです。

[3] 原発被災地を訪ねて…福島県須賀川市 上坂 保太郎

はじめに

まず、最初に自己紹介をさせていただきます。私は最初 28 年間で京都で過ごした後、東京で 26 年過ごし、16 年前に福島に移りました。現在郡山市の南にある須賀川市に住んでいますが、仕事も定年になったので、そろそろ子どもたちの近くである東京に引っ越そうかと考えています。今回、大飯原発差止訴訟原告団団長であり、学生時代(大学教養部)に同じクラスであった竹本修三氏より、今回の見学会に参加しないかとの誘いを受けて、震災後の浜通りの状態を全く見ないまま福島を離れるのは残念と思っていたところだったので、喜んで参加させていただきました。なお、残念ながら福島第一原発から 58km の地域にある拙宅は、かなり放射線量の高い地域にあり、庭での値は 2013 年 12 月 6 日現在で 0.19 ~ 0.61 マイクロシーベルト/時(土の上では 0.35 ~ 0.61 マイクロシーベルト/時、コンクリート上で 0.19 ~ 0.36 マイクロシーベルト/時)です。ちなみに 2011 年 10 月時点では 0.64 ~ 2.08 マイクロシーベルト/時でした

津波痕

志賀さんに案内していただいた避難指示の出ている南相馬市小高区で、復興が全く行われていない状況を見ました。このことは報道により承知していましたが、防波堤の崩れたあとや志賀さん宅での津波の痕などを実際にみると、自然の力の大きさに改めて恐怖の念が生まれました。浜岡原発でのように防潮堤を高くすることにより安心しようとするのは非常に危険と感じました。

懇親会

福島原発訴訟団のお一人が福島で漁業が解禁になってもはたして消費者が福島の魚を買うかと心配しておられました。現在、東京のスーパーにいくと、宮城、新潟、群馬、茨城、栃木など近隣諸県の米は棚に並んでいますが、福島の米だけは見られません（震災後新米がでまわるまでは並んでいました）。また、私の住む須賀川市はキュウリの産地として全国で 50 %以上の生産量を誇っていましたが、震災後は東京ではほとんど見なくなりました。残念ながら、福島ものは当分福島県民が消費するしかないのかと福島の友人と話し合っています。

「のりこ」のご婦人連のお一人が、「私はこの環境の中で孫を育てている」と叫ぶように言われました。それを聞いて、私の郡山在住の若い友人のことを思いだ



(▲相馬市の『野馬土』農産物直売所にて)

しました。彼は郡山市の職員で除染を担当しています。また、かわいい5才の娘がいます。彼の家も放射線量の高い地域にあるようですが、彼は「20 ミリシーベルト/時 までは大丈夫なはずだから」と自分にいきかせるように話をしていました。彼も立場上そう思い込ませざるを得ないのでしょうか、内心は不安を抱えていると思います。福島で、子供を持つ人と話すと皆非常な不安を抱えています。ただ、自分も奥さんも福島で仕事を持っているなど、福島から逃げられない人がほとんどです。懇親会の席上、福島原発訴訟団のお一人が「年寄だけの家庭は、放射線量などあまり気にしないが、子供を持つ人は不安を抱えている」といわれましたが、事情は中通り（海岸に近い側は浜通りと呼ばれています）も同じです。震災後、拙宅の近くでは外で遊ぶ子供は非常に少なくなり、子供の姿は登下校時以外にはあまり見かけなくなりました。これは現在も続いています。

仮設住宅での懇談

福島県中通りでは、拙宅のように放射線量のかなり高い地域では、近々除染が始まることになっています。その際、除染で出たゴミは各自の庭に穴を掘ってそこに埋めるという説明を受けています。そこで、今回飯舘村仮設住宅の自治会長さんとの懇談の際に除染で出たゴミの置き場をどうされるかをお聞きしました。仮置き場を置くことになっているが場所についてはいろいろ議論があり未定ということで、やはり我々も各自の庭に埋めておくより仕方ないかと納得しました。

飯舘村

飯舘村中心部に近づくにつれて放射線量の値が高くなったが、村役場の前では 0.52 マイクロシーベルト/時と拙宅にくらべて少し高い程度であると感じていました。しかし、車が長泥地区との境界に近づくにつれ、線量計の値はぐんぐんあがり、ゲートの前の枯草の直上で 11 マイクロシーベルト/時、1 m上で 6 マイクロシーベルト/時を記録しました。驚いたのはそのゲート前におられたまだ 20 代と思われる保安員の存在でした。一方、先日のテレビでは 4 号機のプールからの使用済燃料の運びだしのシーンを放送していました。そこに映っていた線量計は 0.08 ミリマイクロシーベルト/時 (80 マイクロシーベル

ト/時)を示していました。また、原発構内の屋外でがれきの処理にあっていた人々がおられました。その場所は数百マイクロシーベルト/時でした。このような異常な高線量下で働かざるを得ない人々に申し訳なきを感じるとともに、こういうところにわれわれ老人をうまく活用出来ないかと思えます。

そのほか

大飯原発訴訟団の事務局長吉田明生氏によると、参加者募集段階で一原告より「汚染のひどい福島に人を送り込むような企画をなぜされたのでしょうか」というメールがあったということです。その汚染のひどい地域に住む福島県民の一人として、大飯原発訴訟原告団の中からこのような言葉がでてきたのは大変残念であり、悲しい気持ちがします。さきにも述べましたように、福島の農産物が福島内でしか売れない状況を考えあわせると、「棄民」という言葉が浮かびます。原発事故直後は、東京で福島ナンバーの車へのガソリン給油を拒否されたことがあると聞いています。そのようなヒステリックな状況からは少しは落ち着いてきたと思いたいのですが、充分改善されているとは思えません。このような中非常に苛酷なスケジュールの下、福島まで来ていただいた皆様に感謝するとともに、これからぜひ福島の産物の宣伝をしていただければと願っています。

[4] 弾丸ツアーで思ったこと…京都府城陽市 竹本 修三

「福島は寒いよ！」と多くの人に言われてたくさん着込んでいったが、11月末の福島は京都より暖かく、日差しも穏やかであった。現地に出迎えてくれた人達の心も暖かかった。「着膨れのおろかなる影曳くを恥づ(久保田万太郎)」という心境である。

今回の「弾丸ツアー」に参加して、福島の現状を実際に目で見て耳で聞くと、これまで活字や映像で理解したつもりになっていたものとはまったく違っていた。福島第一原発の事故後、2年半も経っているのに、とても収束しているとは言えず、未解決な問題が山積していることがよくわかった。老骨には体力的にしんどかったが、得るところの多い有意義なツアーであった。

古希を過ぎた私は、多少間接被爆を受けようが自分自身はあまり気にならないが、孫の世代が今回福島の子供達が味わったような苦勞を今後強いられるようになることは断じて許せないと強く思った。

11月27日に飯舘村から相馬市に強制避難させられている方々の仮設住宅を訪問した。仮設住宅は2年を目途に生活することを想定しているため、間取りは狭く、基礎がしっかりしていなくて隣との間仕切りも薄いため、隣で子供が飛び跳ねると、その振動や音がモロに伝わって来るという。仮設住宅の自治会長は、「ここに来て既に2年になるが、あと何年ここに住まなければならないかわからない」と肩をすぼめて言った。私はこの頃「終活」を



(▲相馬市大野台の仮設住宅にて。説明は佐藤さん)

考えていて、家族には「病院では死にたくない。最後は家のタタミの上で死にたい。無駄な延命治療は頼むな。もう駄目だと言われたら、病院から家に連れて帰ってくれ」と言っている。しかし、福島原発事故による放射能漏れのために、心ならずも自宅に住めなくなって仮設住宅で暮らすことを余儀なくさせられた人々の生活を目の当たりにして、「仮設住宅で死ぬのなら、病院の方がまだましか…」と思った。仮設住宅で奥さんを亡くされたと聞く自治会長さんも私と同じ心境ではなかろうかと勝手に想像した。

原発の過酷事故は、何も悪いことをしていない周辺の住民の平穏で慎ましい暮らしを根こそぎ奪ってしまった。経済的な面ばかりではない。人間性をズタズタにしてしまった。強制避難地域から無理やり仮設住宅に移された人達は、一応補償を受けていて当面の生活は心配ないかも知れないが、仮設住宅を受け入れた市町村でその近くに住んでいる住民は、そのような補償を受けておらず、仮設住宅の住民が働かずに昼間から酒を飲んでいるのを見ると快く思わない。仮設住宅の住民にしてみれば、自分達が望んでここに来たわけではないし、酒でも飲まないと言いきれないという思いがあるであろう。どちらにしても面白くない。

また、強制避難地域の近くの同じ街に住んでいる住民同士でも、漁業を生業としている人は汚染された海に漁に出られないから補償をもらっているのに対して、そこで小売業を営んでいる人には補償がないとすると、お互いの関係がギクシャクしてくる。さらに、強制避難地域から他の地域に避難している人達には補償があると思うが、強制避難地域以外から自主避難している人達には十分なケアがなされていないのではなかろうか。

強制避難地域の線引きは、いわば便宜的なものである。炉心がメルトダウンからメルトスルーに達した現状は、「チャイナシンドローム」の世界である。この状態で放射能に汚染された地下水を封じ込めるのは至難の技であろう。メルトスルーした炉心がこの先、大地震の揺れなどで、どうなるかもわからない。また、いま進められている核燃料棒の処理についても不安がつきまとう。そんな状況を見ていると、子供の将来を考えて、強制避難地域以外からでも避難したいと考える人がいて当然である。福島原発の事故は、人間が人間らしく生きていく「基本的人権」を奪ったのである。国や東電は、その償いをしっかりしなければならない。最近各地ではじまった避難者の原発賠償訴訟が問題解決につながってくればよいと考えている。立法や行政が頼りにならないいま、司法にまで見捨てられては立つ瀬がない。



(▲南相馬市小高区にて)

私は一人の地球物理学者として、福島第一原発の事故が例外中の例外の極めて特殊なケースであったのではなく、地震国ニッポンに設置されている全ての原発が同様な事故を引き起こす可能性を含んでいると考えている。それに、ハイテクの粋を集めたはずの原発であるが、それを扱うのは人間である。立ってられないほどの激しい地震動に襲われたと

きなど、人間は訓練時のように冷静に対応できず、操作ミスをしてしまうことは、福島第一原発の事故調査報告を読んでも明らかである。

福島第一原発事故の強制避難地域が現在の範囲で済んでいるのは、事故後も現場に残って対応業務に従事した約 50 名の作業員の献身的な努力によるところが大きいですが、偶然も放射能漏れを少なくする方向に作用した。一步間違えば、東京まで避難地域になったかも知れないのだ。こんな危険な原発が稼働していると不安でたまらないので、わたしはいま、大飯原発差止京都訴訟の原告団に加わっている。

ひとたび事故を起こせば、人間性を損なうだけでなく、地球上の生物の存続をも危うくする全ての原発をただちに廃止に追い込まなければならない。今回の福島ツアーに参加して、その思いを一層強くした。

[5] 福島交流ツアーに参加して思うこと…京都府京都市 吉田 明生

福島交流ツアーの企画が出てきて、大飯原発差止訴訟の原告に参加を募った段階で、原告の中からは、放射能汚染の福島に行くようなことは止めて欲しいという意見もあった。お気持ちはよく分かる。僕自身は、リスクと見学を天秤にかけて後者を選んだ。

弁護団から初めて聞いたことだが、2011 年に福島第一原子力発電所が過酷事故をおこすまで、環境基本法では、放射能汚染は枠外に置かれていた。放射能汚染は、原子力基本法などに任せてあって、こちらの法律では、安全神話によって原発事故は起こらないことになっていたわけだ。環境基本法では、大気汚染、水質汚濁、土壌汚染、騒音、振動、地盤沈下、悪臭という典型七公害だけが対象となっていて、環境基準の設定や環境基本計画の策定などをするようになっていた。回復不能なほどの深刻な大気汚染、水質汚濁、土壌汚染をもたらす放射能汚染が対象外であったとは、信じがたい。

原発事故の後、環境基本法が改正されて、放射能汚染も対象となったが、環境基準などは設定されていない。そのせいか、1 ミリとか 5 ミリとか 20 ミリ（シーベルト/年）といった数値があちこちから出てきて定まらない。自然界に多少の放射能があるといっても、原発事故由来の放射能汚染は「たいしたレベルではない」どころか、脱原発によってゼロにできるものである以上、ゼロをめざすべきだと思う。

現在の政治、原発事故に対する政治の対応は、残酷なものだ。中通りといわれる福島市でも、原発による汚染は、明らかだ。しかし、30 万人近い福島市民を避難させるとなると、その数も多い上に、東北新幹線、東北自動車道まで閉ざさざるを得なくなる、ということ、「現実的でない措置」は採用されることなく、基準の数値の方をいじることになる。基準の数値を現実に合わせているのだから、新たな問題は起こらなくなる。こうして、福



(▲耕作されない農地。車中より)

島市、いわき市、郡山市など、「比較的汚染の程度の低い」地域の住民は、捨てられることになる。こうした地域から「自主避難」した人々は、避難した各地で苦難の道を歩んでいる。訴訟に立ち上がる被災者が出てきて、裁判が始まっているのは、当然の流れだろう。

福島駅からバスで浜通り方面に向かう途中、中山間地の田畑は耕作が放棄されて荒地になっているところが目立った。人が暮らすことができなくなった地域はなおさら、多くの田畑はうち捨てられたままだ。非日常の世界も、時間の経過とともに見慣れた光景になってしまうのだろう。あまりにも日常になってしまった荒地の風景は、新聞などマスコミでは改めて報道されることがない。うち捨てられた田畑に、農作物が栽培される日は、もう決して来ないのではないかと、暗い気持ちになった。確かに、今回の福島交流ツアーは、ダークツーリズムであった。

福島原発の事故以来、農産物や水産物など食品の放射能汚染が大きな問題になっている。今回、見学に行った農民連の施設では、米の全量検査を始め、安心して安全な農産物の供給に力を入れている。交流した漁民のお母さんたちは、安全性を強調していた。確かに皆、努力している。それでも、原発事故由来の放射能をいっさい拒絶したい、拒絶すべきだという立場もあって、そこにも道理がある。

そしてまた、別の問題もある。確かに放射能汚染は大きな問題であるが、産地の偽装、数々の添加物、残留農薬、遺伝子組み換え作物など、農産物や加工食品をめぐる問題はあまりにも多い。問題を拡散させる意図は全くないが、同質の問題が数多くあることも事実だと思う。

人の生命や健康よりも、効率的な農作物栽培、高利潤をあげるための食品生産をめざす道は、原発の存続をめざす道と重なるように思われる。

帰りの夜行高速バス乗り場、福島駅前、何ごともなかったように光り輝いていた。しかし、その明かりはすべて、原発に由来することのない電力であることが、被災地・被曝地福島にとってせめてもの救いだと思った。たかが電気をつくるために、原発なんかを使うことはないのだ。

[6] ツアーの経験をバネに…埼玉県さいたま市 伊豆野 潔

私は東京の出版労連・出版情報関連ユニオンに所属しています。したがって原告の一人にはなっているものの、大飯原発差止訴訟にはほとんど貢献できていません。にもかかわらず、原告団の福島ツアーに誘っていただき、貴重な体験ができたことに感謝しています。いくつか絶対に忘れないであろうことを書いてみたいと思います。

26日福島駅前から2時間ほどかけて常磐線の原ノ町につき、バスを降りたとき最初に目に入ったのが、シャッターが下りたままの Books 広文堂という看板をかけた書店さんでした。私は取次という書店さんに出版物を卸すところで働いていたので、いきなり大地震のために廃業されたと思われる書店さんを見てショックを受けました。

津波の跡がそのままの人家や海岸の荒涼とした風景を見た後の浪江町の「希望の牧場」では、牛はゆったりと餌を食べ、美しい牧場風景が広がっている。しかし現在も線量は3マイクロシーベルト/時ほどあり、牛は原発事故の生き証人(牛)として生かされている。代表の吉澤さんの「原発反対運動をやってきたのに、原発の被害者になり、悔しくてならない」「浪江町は捨てられた」「仮設でみんな折れてる。仮設で人生終えていいのか」「24時間輝く渋谷と、チェルノブイリと化した福島」などの痛切な言葉が頭に刻み込まれました。

その後に訪れた避難解除準備区域の南相馬市小高区は、多少の車は走り、国 or 自治体に半ば強制されて営業している信用金庫などがあるが、ほぼ無人の町。じわじわと得体のしれない恐怖感に襲われてくる。

ホテルでの生業訴訟の人たちとの交流では、75年に福島第一原発の建設差し止め訴訟を行った方の貴重な話を伺うことができたことが印象に残りました。

27日は飯館村の人たちが避難している相馬市大野台の仮設住宅での自治会長さんの話が、強く印象に残っています。イヤホンをつけてTVを見ているといわれたので質問すると、壁はベニヤを打ち付けただけで隣の話声などはすべて聞こえるとのこと。もともと仮設の寿命は2年であり、ガタがきているところも多く、夏は暑く冬は寒いとのこと。奥様を仮設で肺炎により亡くされたとのこと。肺炎になったのは仮設のせいとはおっしゃられなかったが、胸中は察するに余りあります。国の無策に暗たんたる思いと強い怒りを感じざるを得ませんでした。

飯館村は非常に美しいところで、一見豊かな農村に見えます。もちろん放射能がなければですが。

居住制限区域であるが、除染も終わっていて空間線量は0.5マイクロシーベルト/時である町役場のある中心部から、帰還困難区域である長泥に向かうと、線量計の数値はだんだん上がっていき、車内でも3.15まで上がる。

頭は危険だ、危険だと言いつけるが、周りの風景は相変わらず美しく、皮膚感覚では全く怖くない。ただ線量計の数値が上がるだけだ。何とも奇妙な感覚に陥ってしまった。



(▲飯館村の帰還困難地域、長泥の入口)

この線量計だけが危険を知らせて、皮膚感覚では何の危険も感じないというところに放射能の怖さが、原発がここまで拡大したことの怖さがあるのだと頭ではわかっているのだが。この経験はずっと忘れることはないでしょう。

わたしが活動している出版労連原発問題委員会は『まだ、何もはじまっていない』『私

たちは、忘れない』という小冊子を発行しました。今回のツアーで「まだ、何もはじまっていない」福島をこの目で見、感じることができました。

原発を推進してきた国と電力会社はこのような過酷な現実があるにもかかわらず、「福島原発事故の経験を生かした世界最高水準の技術」という詭弁で、原発の再稼働と輸出を推し進めようとしています。許されることではありません。このツアーで経験したことを決して忘れず、すべての原発の廃棄まで皆さんと共に頑張ろうと思います。

[7] 福島交流ツアー感想文…兵庫県神戸市 高島 美智子

* 私の放射線量のうけとめ方について *

11月26日夜、相馬市松川浦「ホテルみなとや」での現地の生業裁判原告団や漁師の母ちゃんたちとの会食の席で、訪問団の一人が「放射能で汚染されている福島へ若い人を連れてくるのは問題があると言われた」と発言したことに対し、漁師の母ちゃんが「私らは政府の言うことを信じて孫とここに住んでいるのに失礼でねえか」と不快感を表され、それに対し、一同の間で、意見の相違をめぐって議論がありました。

私はその場では気後れして発言できませんでしたので、この機会に述べさせていただきます。私には、2歳から小5までの孫が4人います。その子らに放射能で汚染された未来を残してはならないという気持ちで反原発運動をしています。これは私のライフワークだと思っています。私は事情が許すならば、福島県を中心とした放射能汚染地域には人は住むべきではないと思います。福島に生まれ育った人々にとっても、日本にとってもかけがえのない地であることを考えると断腸の思いです。いったいどの範囲までが危険かということはわかりませんが、持てるだけの情報をもとに、自分の感受性を信じて、放射能を恐れていくつもりです。後世に悔いを残さないために。現在の科学では、人体に与える影響はほとんどわかっていないと思います。

広島やチェルノブイリでは、何十年か後に影響が出てきているし、子孫にまで影響があることが推測されます。放射能は見えないし、におわないし、感じないから、自分で知識を増やし、感受性を持ち続け、鈍感になったり、無関心になったり、慣れてしまっただけではありません。除染には何年もかかり、限界があります。廃炉作業には膨大な年月がかかるし、危険もいっぱいあります。放射線漏れ隠しもあることでしょう。

放射能汚染地域に住まざるを得ない人（▲飯館村役場の前にて。奥、説明は渡辺さん）や、その地域に住むことに危機感を持たない人や、子どものために県外に避難した人の間に分断がありますが、それらの人々は被災者なのですから、お互いに反目しあうのは悲しいことです。お互いの立場、意見、感性を尊重してほしいと思います。政府、東電、学者、企業は住民の健康、いのちを最優先にして正しい情報を出し、放射能の低い他地域への移



住のためのあらゆる援助（住宅、仕事、生活保障）を尽くすべきだと思います。ふるさとに代えられるものはないし、漁業、農業など地元でしか成り立たない仕事は、完全に復旧するのは不可能でしょう。ロシアのように広い国土がないので、移住する場所もないでしょう。ここまで書いて自分が絵空事を言っている気がして空しくなりました。国と東電は、なんという取り返しのつかない事故をおこしてしまったのでしょうか。

福島交流ツアーでお会いした現地の方々（中島孝さん、新妻慎一さん、村松孝一さん、志賀勝明さん、佐藤襄二さん、村松えみこさん、渡辺勝義さん）やツアー参加者の皆様から私は強い印象を受けました。皆様、やさしくて強い。襟を正される思いです。私も毅然と原発と闘いたいと思いました。

[8] 福島ツアーに参加して…兵庫県神戸市 前田 依理子

大飯原発差し止め訴訟原告団の一員として、このたび福島ツアーに行くことができた。現地を案内してくださった生業訴訟団の方の言葉の一つ一つが胸に残り、また案内された場所を通して、いろいろ勉強させていただいた。これまで「福島を忘れない」と決意のように関電前で叫んでいたが、忘れることができない福島との出会いになったのは、ツアーに参加できたおかげだと思う。

（▼相馬市大野台の紅葉）

はじめて訪れた福島は、雨ではなく木の葉が降っていた。

道の上にも田んぼにもたくさんの木の葉が舞い上がり、降り散る様子はとてもきれいだった。きれいなところだったんだなと思った。放射能には色も匂いもないから、今も変わらず景色は美しい。地元の人々には自慢の自然だったにちがいない。他に変わることでできない故郷にちがいない。



「ここではおいしいきのこがとれました。いえ、今もいっぱいあると思いますが、決して食べられません。」

耕作はされず草だらけの田畑がひろがる。家々の静かなたたずまい。

「一見、変わらない景色に見えますが、今ここにはだれも住んでいません。」

「学校です。使わないとこのようになるのです。」淡々と言われた現状の説明。

繰り返された案内の方の声の調子が、耳の底に残る。

そして津波の被災を受けた地区。

「今日みなさんが、泊まれる みなとやも 津波の被害を受けました。そして復興してお客を泊められるところまでできたのです。ですが、このあたりは手付かずです。原発のせいで、放射能のせいで、何も進んでいません。」

「東電は津波で流されずに残った家には保証しますが、流されたうちには保証しないといっています。」津波に流されたんだから、住めないのは放射能のせいではなく、保証の必要はない、とでもいいたいのか。私が見たのは、そこに村があり家々が並んでいたとは思えない、草だらけの原っぱだった。瓦礫がところどころ、ただ集められていた。以前は

見えなかったという海がみえていた。流れ着いた家の二階部分だけがあったり、ひっくり返った車もあの日のまま。小さな村で多くの方が亡くなったそう。人々のショックと悲しみは如何ばかりだったろう。そのさなか、原発事故の放射能のせいで、避難させられたのだ。原発事故という人災が、さらに取り返しのつかないほどの打撃を津波の被災者にあたえた。悲しみが癒えるどころか、悲しみの事実が信じられない時だったにちがいない。亡くなった家族を悼むにも、家の跡地にも行けない。地震後の新しい一歩を踏み出すにも、東電の原発事故がそれをさせず、邪魔し続けている。申し訳ないという思いはないのだろうか。

希望の牧場。マイクロバスが牧場に近づくにつれて放射能の線量は次第に上がっていった。正直言ってちょっと怖いと思った。でもここを離れず住んでいる人がいるんだ。しっかり話を聞いて帰ろうと思った。インターネットやユーチューブを通して希望の牧場について少しは知ってはいた。線量の高さはスピーディーでわかっているのに避難指示すらされなかった浪江町。第一原発の立地地元ではないところには、どこからも連絡が来ない中で、自衛隊員から「ここは線量が高い。政府は情報を隠している。避難したほうがいい。」と言われたそう。吉澤さんの話の中で‘棄民’と言われた言葉がわすれられない。

悲しみと怒りの象徴、希望の牧場。

仮設住宅や飯館村を訪ねたときにも、話を聞いているうちに、何度も吉澤さんのその言葉「棄民」が思い出された。

仮設住宅で世話人をされている方からお話を聞いた。

避難後の不安定な仮住まい。そのさなか、亡くなっていく方が増えているそう。ご自身も最近おつれあいを亡くされたと言う。亡くなる本人も、その家族も、原発事故に翻弄されての不本意な別れは、他人には想像できないつらさだろう。

不条理に対するぶつけきれない怒りやくやしき、続く日常の生活の困難。

その他方で、復興は進んでいるんだとアピールし宣伝するためだけの復興事業。（漁具を入れる倉庫はなぜか立派ななまこ壁。）

計画された除染は遅々として進まず、除染範囲は狭められ、放射能の濃度が高いままでも帰還を無理して進める動き。

「年間 20 ミリシーベルトで住んでいいよ。一部の専門家は放射能と病気の因果関係はないって言ってるし。」というのは、「あなたたちのことはどうでもいいのよ。」という意味か。くるくる変わる放射能の安全基準によって、避難しようとする人と避難しない（できない？）人の間に生まれる軋轢。補償金を通しての人々の分断。

津波被災者のことも原発事故被害者のことも、大事にされていない。

原発事故は収束していなくても、収束宣言すれば収束。

汚染水はコントロールされてなくても、アンダーコントロール。

復興はそろそろできたことにして被災地の人々を励ますふりだけし、福島を忘れて東京オリンピックへ。そしてまっしぐらに原発再稼働。

こんなことを決して許してはならないと思う。

生業訴訟団のかたと、漁業者の女性たち、一緒に行った方々との交流会は楽しく有意義だった。私にとってはっきりと顔が見えるようになった福島。福島を忘れない。

原発のない社会をつくろう。

[9] 沢山学んだ 福島ツアー…京都府城陽市 亀井 成美

1. 放射線は、痛くもかゆくもない。五感でつかめない不思議な世界。

「原発裁判原告団」のツアーで、福島へ行って現地の方々と交流してきました。ちょうど「秘密保護法」が衆議院を強行通過したところです。

きれいな紅葉の季節でした。柿があちこちでたわわに実っていました。「おいしそうやな」「渋柿はな、ドライアイスを使ったら簡単に渋抜きできるんやで」などと、クルマの中で話は盛り上がりましたが、景色の中に、人の姿は見当たりませんでした。そして、突然、異様な白い集団、毒ガスマスクをした人たちが、除染作業(?)をしているのが目に入りました。

農村地帯、「豊かな実り」が黄金色に輝くはずの、一見「のどか」な風景の中で、田んぼにはえているのは雑草でした。

まち・・・どこからか、誰かが出てきそうな街で、人は誰もいませんでした。

山の中で見た牧場も、印象深いものでした。＜希望の牧場＞です。広大で、緩やかにうねった草原で、沢山のウシが、ゆったりと寝そべり、のどかに草を食べていました。しかし、これは放射線を浴びて食用にならなくなった被曝牛の群れでした。3.11 以前に警戒区域で飼われていたウシは、約 4000 頭。その大部分は餓死し、または「殺処分」されました。ここにいる 300 頭あまりのウシは、「救命」されたものでした。



(▲右端が「希望の牧場」の吉澤さん)

福島は「不思議な」世界です。そして、海の近くの南相馬市では、津波で流され、破壊されたままの家々や、ひっくり返ったままのクルマがありました。再建に取りかかることができずに時間が止まってしまったようになっています。

放射能汚染は、見えない、味においもしない、五感ではつかめないものです。そして、「直ちに」被害が出るとは限らない。「必ず」被害が出るわけでもなく、「絶対に」安全でもない、というやっかいなものです。そこで毎日の格闘が行われています。知識と情報を駆使しての勝負です。どれだけ、放射能について、理解しているか。そして、どれだけ、正確な情報を持っているか。

2. 線量計の値をどう見るか

今回のツアーでは、線量計を持参し、スタートの京都から、帰着の京都まで、できるだけ測定しました。

今回測定したところの多くはコンクリートの上で、人のよく通る場所でした。測定していて、「京都とあまり変わらないな」と思う場所も多くありました。地道な「除染」の成果かもしれません。しかし、牧場や飯館村長泥地区への道の途中などで測った、土や草の上では非常に高い値となりました。福島は、非常に森林の多い県である、ということは、県全体としては、非常に高い値のままなのではないだろうか。除染を行った一部地域の値を「福島の全体状況」のようにとらえると、全体を見誤ることになるかもしれないと思います。

田んぼの除染はどうするのか?。「表面の土を剥いで、山の土を客土する」と答えてくれました。野馬土の農民組合では、米の全袋の検査をしているのを見学しました。1台2800万円もする機械でした。玄米で100ベクレル以下が基準だが、昨年、米、1万1千袋を検査した中で、70袋、セシウムが基準量より多く検出されて、大問題となった、と話してくれた。田んぼでカリウムが不足すると、その代わりに、カリウムとよく似たセシウムを吸収してしまうのだそうです。

悪戦苦闘の中での復興作業です。港では、朝、多くの漁船が戻ってきます。「漁を再開しているのかな」と思っていたら、津波で壊された瓦礫を回収してきているのだという。

未だに地味な作業が続いています。また、一部では、試験操業も行われています。様々な種類の魚について、放射能汚染の状況が調べられています。

3. 住民の中に分断を持ちこまない。

夜の交流会で、元気な漁師のオバチャンが「風評被害、何とかしてもらわないと困る。美味しい魚、私なんか、毎日食べているんだからね。孫も、一緒に元気に暮らしているしさ。」と話していて、放射線の危険性について、ひとしきり議論になりました。どちらが正しいかは置いておくとして、その様なことが率直に話し合えることがとても大切だと思いました。

しかし、住民の中で、深刻な分断が生じやすいのが、放射能汚染問題の厳しさだと思いました。

「危険」と思って避難したひとと「安全だろう」と思って、避難しなかったひと。「危険」だとは思ったが、避難できなかったひと。どこまで安全かがハッキリせず、学者によっても基準が異なる中で、生活上の利害も絡んでとても難しいことになります。

「補償」も難しい。「十分な補償を」は、当然なことだが、カネを渡せばそれですむ話ではない。「漁ができないから」と休業補償をもらって、収入はそれで一定補償されたとしても、仕事はできていない。「やりがい」はなく、技術・力も落ちていく。未来への展望は開けない。

大きな仮設団地で、飯館・浪江・南相馬・・・からの避難者が一緒に住んでおられました。しかし、各地域、お互いの交流はむつかしいとのことでした。各地域によって条件が違い、補償額が違っている。「どれだけ補償が出るか」が大きな関心事ですが、その話になると、ぎくしゃくしてくるようになるようです。

また、復興資金が、本当に、住民の役に立つように使われているかも、疑問でした。相

馬漁港で見られた、林立する巨大な「漁具置き場」【写真→ p.10】。本当に「必要なもの」としてつくられているのか？ 見栄えでやっているのではないか。先日、「復興資金が必要などころで使われていない。様々に流用されている」との新聞報道があり、ベトナムでの原発建設調査費にまで流用されていると報道されていました。「被災者の立場で、速やかに」を、しっかり監視していかないといけないと思いました。

4. とんでもない危険をもたらす「秘密保護法」

私たちが行っていた頃、ちょうど福島で「秘密保護法」の公聴会が行われていましたが、自民党推薦者を含めて、全員、秘密保護法に反対の声を上げていました。当たり前のことです。

放射能汚染は、見えない、味もおいもしない、五感ではつかめないものです。

原発、放射能汚染事故に対応するのに、重要な情報が、秘密にされる、ということは、原発の安全対策にとっては、致命的な問題ではないでしょうか。

「スピーディ」の情報が、隠されていたこと。そのため、わざわざ、必死になって、寒い雪の中、放射能の濃度の高い飯館村に向かって、避難してきてしまった、というのは、有名な話です。

福島第一原発は、汚染水が垂れ流されたままで、また、新たに燃料棒の抜き出しが始まっています。事故の危険性も指摘されています。

料理では、いろいろな材料を掛け合わせるととても良い味が出てくるようですが、危険な原発、秘密保護法を掛け合わせると、とんでもない危険な状況となります。

秘密保護法で、重要な情報が隠されてしまうことは、そのまま、多くの人命に関わることです。絶対に廃止していくことが必要だと強く思います。

いまのフクシマは、明日のキョウトかもしれません。手を携えて、前進の道を求めていきたいと思っています。



(▲南相馬市小高区の海岸近くにて。

左から二人目が説明する志賀さん)

[10] 飯館村長泥地区進入禁止ゲート…京都府京都市 山田 和幸

ゲートは3ヶタナンバーの国道沿いにありました。今は住人のない最後の民家からクルマで10分ぐらい坂道を登った峠にありました。ゲートの向こう側20メートルほど先に、遠くまで見通せそうな小高い場所が見えます。そこに立つと福島第一原発が見えるのだそうです。

あの日、たまたま風は原発から北西に吹きました。大量の放射能プルームは、この見通せる谷筋をこっちに向かって流れ込んでいました。そして、たくさんの人々も原発から少しでも離れようと、峠に向かってこっちに逃げていたと思われます。プルームの拡散予測データが解析されていたにもかかわらず、そして解析に基づき検査員が実地測定をして解析がそう間違っていないことも分かっていたのに、それでも逃げ惑う人々には一切の情報が示されませんでした。

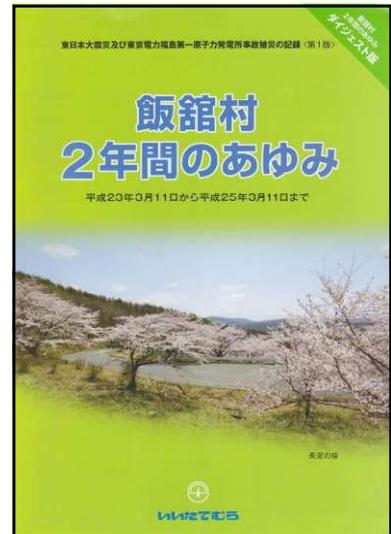
たまたまの偶然が何重にも重なり合った悲劇なのか、ある意図的な力が働いて避難民は棄てられたのか、この国の情報管理の目的は何なのか、強い疑念を持たざるを得ません。このゲートに立ったとき「秘密情報は国民のためにあるのではない」という思いを新たにすることができました。

ゲートで門番に立つ青年。スラッと背も高く、受け答えも爽やかな好青年でした。余程の雨や雪が降れば休憩小屋に入るが、通常はゲート横で立ちっぱなしです。2人で12時間勤務と言っていましたから、青年は日に6時間外気に曝されることとなります。地上1メートルの測定値が4マイクロシーベルト/時前後を示しました。地面の草むらでは10マイクロシーベルト/時を越えました。この青年、単純計算で1日24マイクロシーベルトを浴びる労働環境にいるのです。京都市内の私が住む北区は0.04マイクロシーベルト/時前後ですから、ざっと100倍の汚染環境にいるのです。

目の付近だけを露出し、大きなマスクで覆われた顔からは、青年の素顔全体を見ることは出来ません。一見、平然と、堂々としているようにも見えます。1日中ほとんど人気のない峠道のゲートは、唯一ラジオだけが異様に鳴り響いています。最近では里人が避難でなくなったせいか、熊、イノシシ、猿、野犬、野良ネコも増えたそうです。ラジオは寂しさを紛らすBGMではなく、熊除けだったのです。

青年は、2年9ヶ月前はどこでどんな経験をしたのでしょうか。どんな経緯で、いまこのゲートに立っていたのでしょうか。そして、突然現れ、15分ほどで立ち去った私たち一団は、青年の目にはどのように映ったのでしょうか。

帰京すると、テレビから「避難準備区域が・・・帰還困難区域が・・・」と聞こえてきます。その度に、今頃は小雪降る中、放射能を含んだ風の通り道に立っている、あの青年の姿が浮かんできます。



(▲村が発行したパンフレット)



(▲飯舘村長泥への道にて)

[11] 福島交流ツアーの感想…京都府精華町 布施田 禮子

精華町で脱原発の取組みを細々とやっていたのですが、まだ訴訟団には加入していませんでした。今回亀井さんのお誘いでツアーに参加できて有意義でした。

一年前、南相馬にある共産党のボランティアセンターを訪れ、米とお茶を持って仮設住宅まわりをしたり、被災状況を見て回りましたが、その時とほとんど改善されていませんでした。テレビや新聞報道だけでは解りません。是非みなさんも参加されて、現地を見て下さい。仕事から小学生向けに記録を整理し伝えていくつもりです。特に若い人に参加してもらえるよう声かけし会員も増やせるよう努力します。ありがとうございました。

[12] 福島交流ツアーに参加して…京都府京都市 ル・パップ JP

先日の月曜日、お手紙を確かに落手しました。有り難うございます。

その次の日（火曜日）と昨日（水曜日）、御所を歩きながら、感想文を書く際、得心のいくような言葉を見付けられるのか、とずっと考えていました。それが当分できない…ト…

日本列島で起きたこと＝出来事があまりにも巨大で、あまりにもありえないこと、という感覚が、世界の人々を襲いました。2011年の3月の11日に。

その出来事の二年の八か月後の、11月26・27日の福島交流ツアーは意味がとても深かった。本当に有り難うございます。

帰ってから、福島県立高等学校教職員組合女性部発行の『福島から伝えたいこと あの日の時から 教師と生徒の声』という冊誌をコツコツと読み出しました。

はじめに	あの時、あれから 発刊に寄せて 福島の教師です 3・11を胸に刻むために	福島県立高校教職員組合 福島県立高校教職員組合 福島県立高校教職員組合	書記 長 杉内 清吉 執行委員長 高橋 聡 女性部長 大貫 昭子 編集委員長 小林みゆき	4 6 7 9
I 生徒の声	5回の避難と被曝 かけがえのない日常を失って 避難生活で知った人の温かさ 原発事故の責任と私達の責任 一刻も早く原発事故の収束を 震災で得た大切なものを 「信じること」を学んで 未来への不安 怒りしかない原発事故 散文化的な感想 3・11を経験して 「絆」より「考」「悟」「苦」	原町 高校 原町 高校 原町 高校 原町 高校 小高工業高校 小高工業高校 原町 高校 原町 高校 福島西高校 福島西高校 福島西高校 福島西高校	3年 3年 3年 3年 3年 3年 2年 M・S 3年 T・S 3年 3年 3年 3年	12 13 14 15 16 20 22 23 24 25

p.5の「経験した者しか理解できないとすれば、教育は成り立たない。運動も成り立たない」…「それぞれの苦しみを共有できなければ福島だけでなく日本の、世界の未来はない」という件から考察と言葉を展開しようと思っ
ていましたが、まとまった文を以って、それがすぐ出来ません。申し訳ありません。

日本に居れば、1月中旬の報告集会と報告集をたいへん参考にしようかと思っています。

(◀『福島から伝えたいこと…』の目次。
ただし「II 教職員の声」以下は略)

福島県南相馬市・相馬市及びその周辺地域における空間線量測定

竹本修三・亀井成美

1. はじめに

大飯原発差止京都訴訟原告団の世話人会は、2013年11月26～27日に福島県相双地域（相馬市・南相馬市及び周辺地域）を訪問し、福島原発事故訴訟（生業訴訟）原告団との交流会と被災地域の視察を行うことを計画し、参加者を募った。最終的に12人から参加申し込みがあったが、これに参加したわれわれ2人は線量計を携行し、現地の空間線量測定を実施した。

測定に使用した計器は、京田辺市の「原発ゼロプログラムの会」から借用したもので、堀場製作所製のRadi PA 1000型線量計、製品番号：HGG No.W7B62Y1Yである。

現地での測定に先立ち、11月21日、23日に京都府南部の城陽市・宇治市の数点で計器の性能確認のための予備測定を行った。11月26～27日の相双地域における測定を終えたあと、11月28日に予備測定を行った城陽市・宇治市の測定点で再測を行い、計器の性能に異常のないことを確認した。さらに、京都－福島間往復の夜行高速バスの途中の停車個所でも可能な限り測定を実施した。測定結果は末尾の付表にまとめて示されている。本稿で用いる線量値の単位は $\mu\text{Sv/h}$ （マイクロ・シーベルト/1時間）である。

2. 京都府南部における測定

京都府南部の城陽市・宇治市における測定は、11月21日、23日に、城陽市寺田の深谷第2児童公園、府道久津川交差点（城陽市）、近鉄京都線大久保駅東側（宇治市）の3カ所で実施された。測定結果は、 $0.043\sim 0.074\mu\text{Sv/h}$ の範囲内であった。また、福島県から戻った11月28日の朝に同じ場所で測った値は、 $0.042\sim 0.082\mu\text{S/h}$ であり、この間に有意な変化はなかった。

11月25日の夜、夜行バスに乗る前に京都駅八条口のバス乗場周辺で測った値は $0.082\sim 0.092\mu\text{Sv/h}$ の範囲内であった。また、11月28日の朝、福島から京都に戻り、同じ場所で測定した値は、 $0.076\sim 0.094\mu\text{Sv/h}$ であった。城陽市・宇治市の測定値に比べて、京都駅八条口の値はやや高い。

原子力規制委員会のホームページ(<http://radioactivity.nsr.go.jp/map/ja/>)から閲覧できる「放射線モニタリング情報・全国及び福島県の空間線量測定結果」のなかで、京都府のページには24点のモニタリングポストの値が示されているが、このうち京都府南部にあるのは、**図1**に示すように、①京都府庁（上京区）、②保健環境研究所（伏見区）、③木津総合庁舎（木津川市）の3カ所だけである。これらの点における2013年11月23～29日の測定値がそれぞれ**図2～4**に示されている。これらの点における1週間の変動値は京都府庁が $0.053\sim 0.067\mu\text{Sv/h}$ 、保健環境研究所が $0.053\sim 0.069\mu\text{Sv/h}$ 、木津総合庁舎が $0.049\sim 0.066\mu\text{Sv/h}$ であり、この期間中にわれわれが城陽市・宇治市で測定した値はほぼ妥当な値であると考えられる。これに対して京都駅八条口の測定値がやや高いが、11月25日は午後から荒天で風雨がきつかった。**図2～4**の変動図をみると、3カ所のモニタリングポストがこの日の午後大きく変動していることがわかる。われわれが京都駅八条口のバス乗場で夜行バスを待っていたときには雨は止んでいたが、局所的にこの影響がまだ残っていたのではないか

と考えている。また 27 日の夜から 28 日の早朝にかけても天候が悪く、モニタリングポストの測定値が乱れている。気象庁のデータを見ると、京都では 25 日に 14.5 mm、27 日に 1.5 mm の降水があった。このように、われわれが福島ツアーの行き帰りに京都駅八条口で測定したのは、いずれも気象状況の不安定なときであり、雨のあとには値が高くなるようだ。



図 1 京都府南部の空間線量測定モニタリングポスト。①京都府庁（上京区）、②保健環境研究所（伏見区）、③木津総合庁舎（木津川市）

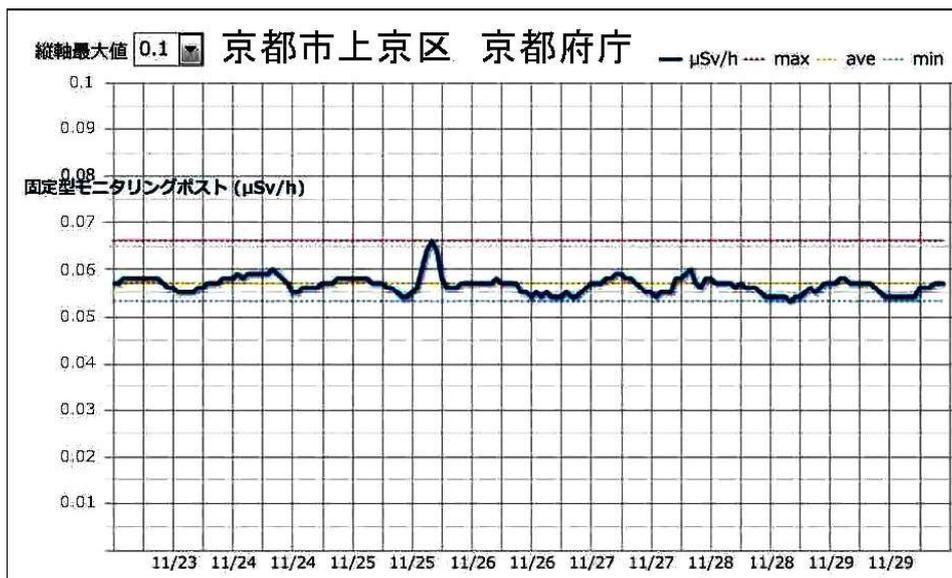


図 2 京都府庁のモニタリングデータ（2013 年 11 月 23～29 日）
（原子力規制委員会のホームページより転載）

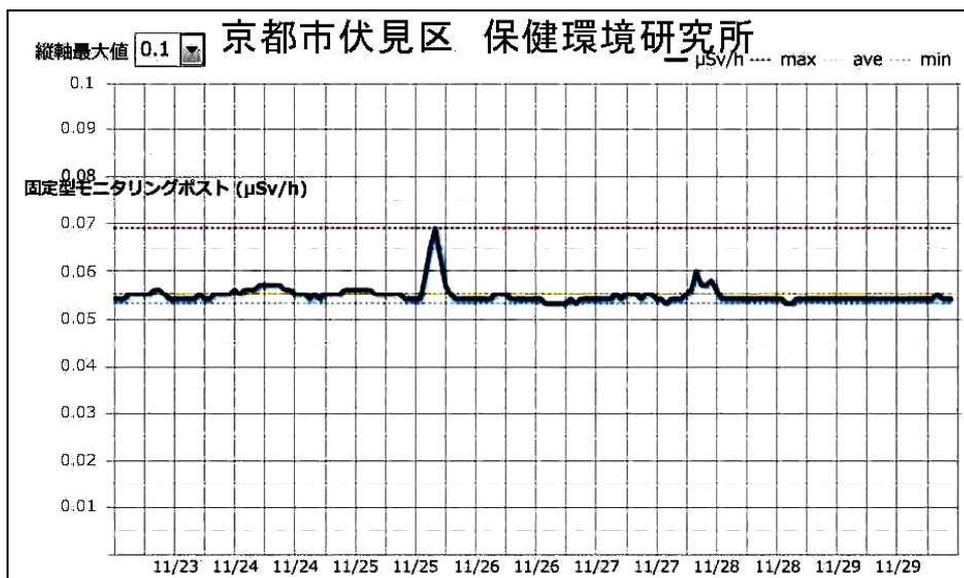


図3 保健環境研究所のモニタリングデータ (2013年11月23～29日)
(原子力規制委員会のホームページより転載)

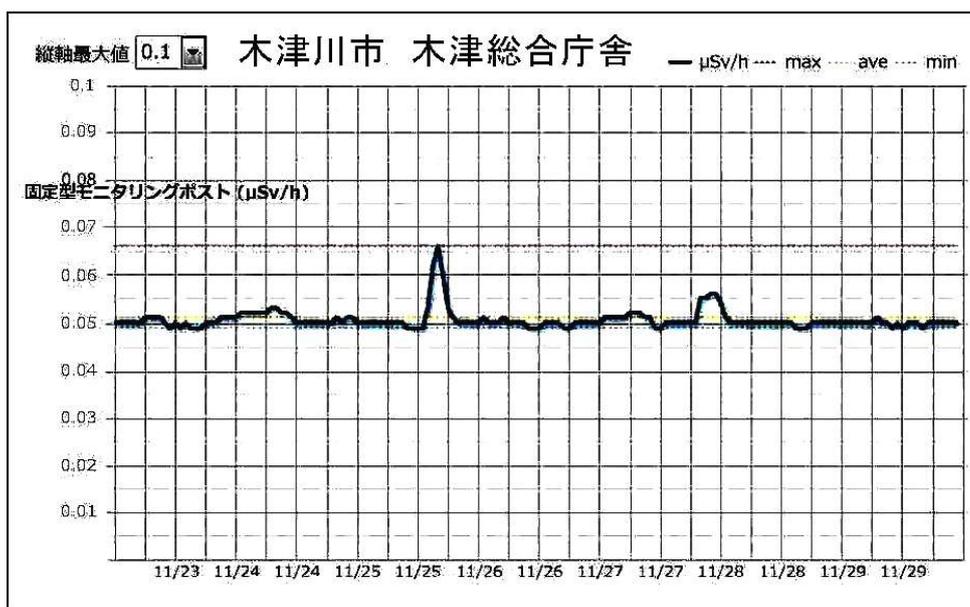


図4 木津総合庁舎のモニタリングデータ (2013年11月23～29日)
(原子力規制委員会のホームページより転載)

3. 京都から福島へ

11月25日の夜、京都駅八条口を出発したバスが最初に休憩したのは、新名神高速道路の土山サービスエリアであった。そこでバスから降りて駐車場で測定した値は、0.068～0.080 μ Sv/hであり、京都駅の値とほとんど変わらなかった。停車中のバスの中で測定した値は0.029～0.040 μ Sv/hであった。

その後、土山サービスエリアを出発したバスは、事故と交通停滞のために中山道に路線変更をするというアナウンスがあり、中央自動車道を通ったのだと思うが、途中でバスの

外にでることは許されず、次に車の外に出られたのは、翌朝 07 時 02 分に東北自動車道の西郷バス停（白河市）に着いたときであった。天気は晴で、気温はそれほど低くなかったが、測定値は $0.266\mu\text{Sv/h}$ と京都の 4~5 倍の値を示し、いよいよ福島に近づいたことを実感させられた。

07 時 28 分に須賀川駅前に着き、そこでの測定値は $0.108\mu\text{Sv/h}$ であった。08 時 10 分にバスは郡山駅前に着いたが、このままバスに乗っていると、福島駅西口を 09 時に出発する路線バスに間に合いそうもないので、そこでバスを捨て、郡山発 08 時 22 分の新幹線に乗り、福島に向かうことにした。郡山の測定値は、駅前の路上で $0.121\mu\text{Sv/h}$ 、新幹線ホームで $0.124\mu\text{Sv/h}$ であった。

08 時 40 分に福島駅に着き、辛うじて 09 時発の路線バスに間に合った。福島駅西口を出た南相馬行きの路線バスが最初に停まったのは福島駅東側の県庁に近い「万世大路」のバス停であった。そこで時間調整をするということで、バスを降りて線量値を測ってみると、 $0.679 \sim 0.681\mu\text{Sv/h}$ という高い値を示した。原子力規制委員会の「放射線モニタリング情報・全国及び福島県の空間線量測定結果」には福島市に 394 点のモニタリングポストが登録されているが、市街地ではほとんどが $0.100 \sim 0.300\mu\text{Sv/h}$ の範囲内である。しかし所々に線量値の高いホットスポットがあるらしい。

再び動き出したバスは 40 分ほどで「道の駅川俣」に着いた。そのトイレの前で測定した値は $0.285 \sim 0.350\mu\text{Sv/h}$ であった。この場所は翌日、飯舘村から福島に戻る途中にもう一度立ち寄ったが、そのときの測定値は $0.236 \sim 0.463\mu\text{Sv/h}$ でやや変動幅が大きくなっていた。

4. 南相馬市・相馬市の市街地における測定

われわれが夜行バス、東北新幹線と路線バスを乗り継いで南相馬市の原ノ町駅前に着いたのは、11 月 26 日の午前 11 時であった。そこで「被災地フクシマの旅」実行委員会の新妻慎一代表と「相馬新地、原発事故の全面補償をさせる会」の村松孝一事務局長の出迎えを受け、その後は村松さんが運転する 15 人乗りのマイクロバスで被災地を案内してもらった。

早速、原ノ町駅前で線量を測ってみると、 $0.222 \sim 0.342\mu\text{Sv/h}$ であった。原ノ町駅のすぐ前にあるモニタリングポストの「南相馬市立中央図書館」の 11 月 23 日から 29 日の 1 週間の変動は $0.212 \sim 0.272\mu\text{Sv/h}$ の範囲であるが、そのすぐ北側にある「駅前北公園」は $0.132 \sim 0.147\mu\text{Sv/h}$ であり、南側に 200m ほど離れた「はなぶさ託児所」は $0.239 \sim 0.256\mu\text{Sv/h}$ である。これらの値と比較すると 11 月 26 日の昼前にわれわれが測定した値はやや高い。

原ノ町駅前からマイクロバスで「道の駅南相馬」に向かい、道の駅の食堂で早めの昼食をとったが、そのトイレ前で測定した線量値は $0.223 \sim 0.273\mu\text{Sv/h}$ であり、食堂テーブルの上で測った値は $0.090\mu\text{Sv/h}$ であった。「道の駅南相馬」に近い「ひがし生涯学習センター」の 11 月 23 日から 29 日の 1 週間の変動は、 $0.140 \sim 0.182\mu\text{Sv/h}$ 、そこから 500m ほど離れた「託児所ひまわり」では $0.201 \sim 0.255\mu\text{Sv/h}$ である。

その後、相馬双葉漁業協同組合の志賀勝明会長の案内で、避難指示解除準備区域になっている南相馬市小高地区に入った。津波で甚大な被害を受けた家屋がそのままの姿で残っているのが痛々しかった。以前は全面的に立ち入りが禁止されていたが、除染がすすみ、今は昼間だけ立ち入りが許されているという。確かにその地域においてわれわれが測定し

た値は 0.103～0.185 μ Sv/h であり、原ノ町駅や「道の駅南相馬」よりも低かった。

南相馬市の市街地では大体 0.200～0.300 μ Sv/h であるが、山間部にはいまだに 3 μ Sv/h を超えるところも残されている（図 5）。

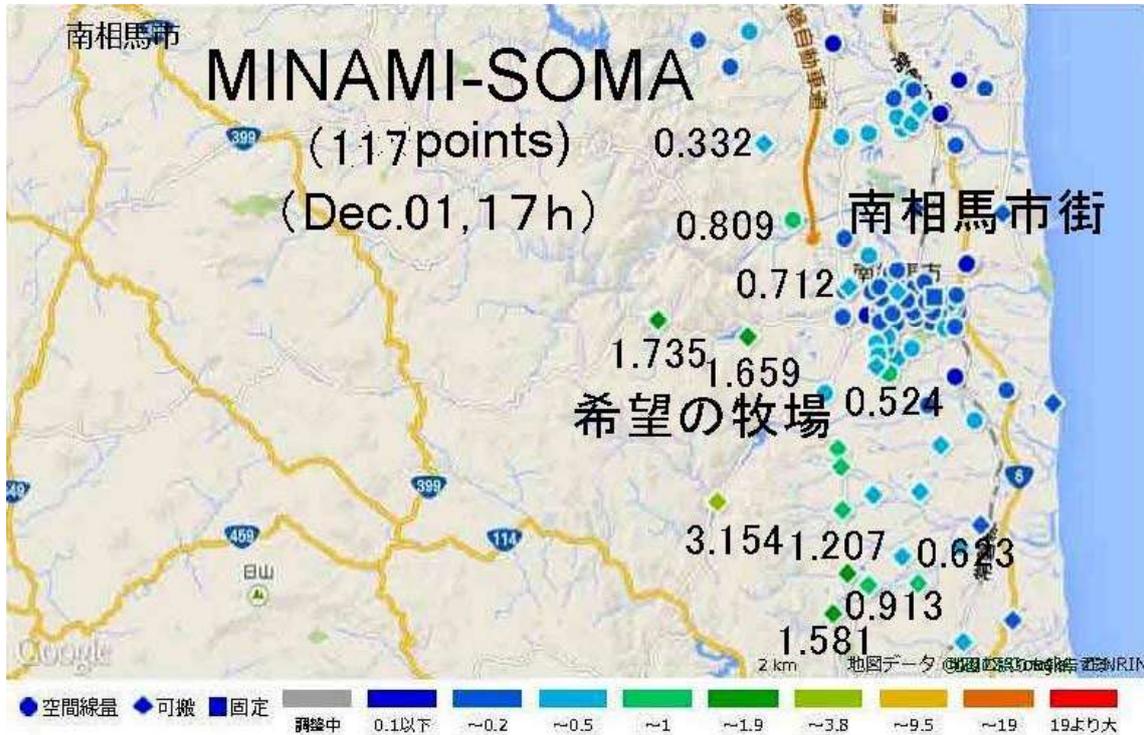


図 5 相馬市のモニタリングポスト（117 点）の分布。
（原子力規制委員会のホームページより転載）

この夜、福島生業訴訟原告団の中島 孝 団長がわれわれ京都訴訟原告団メンバーのために確保してくれた宿は、福島第一原子力発電所（以後、福島第一原発と表記）から北に約 50km 離れた相馬市松川浦の「ホテルみなとや」であった。5 階建のこのホテルは、2011 年 3 月 11 日の津波で 1 階部分が天井まで浸水したそうだが、スタッフ全員が無事で、翌年営業を再開できたという。ホテルの前で線量値を測ってみると、0.097～0.108 μ Sv/h で思ったより低かった。ホテルから 30m ほど離れた海岸の岩の上(約 1m の高さ)で測ったところ、0.056 μ Sv/h で京都府南部と同じレベルであった。

原子力規制委員会の「放射線モニタリング情報・全国及び福島県の空間線量測定結果」には相馬市に 68 点のモニタリングポストが登録されているが、その値は、ほぼ 0.073～0.315 μ Sv/h の範囲である（図 6）。われわれが相馬市で測定した値は、0.056～0.108 μ Sv/h であった。

ホテルから最も近いモニタリングポストとして西に約 1km 離れたところに「高平公園」があるが、そこの 1 週間の変動は 0.153～0.203 μ Sv/h であった。しかし、そこからさらに 700m ほど西にある「相馬市東部公民館」が 0.096～0.100 μ Sv/h、そのすぐ近くの「みなと保育園」が 0.067～0.079 μ Sv/h であり、京都で生活しているわれわれが常時浴びている放射線レベルとほとんど変わらない。

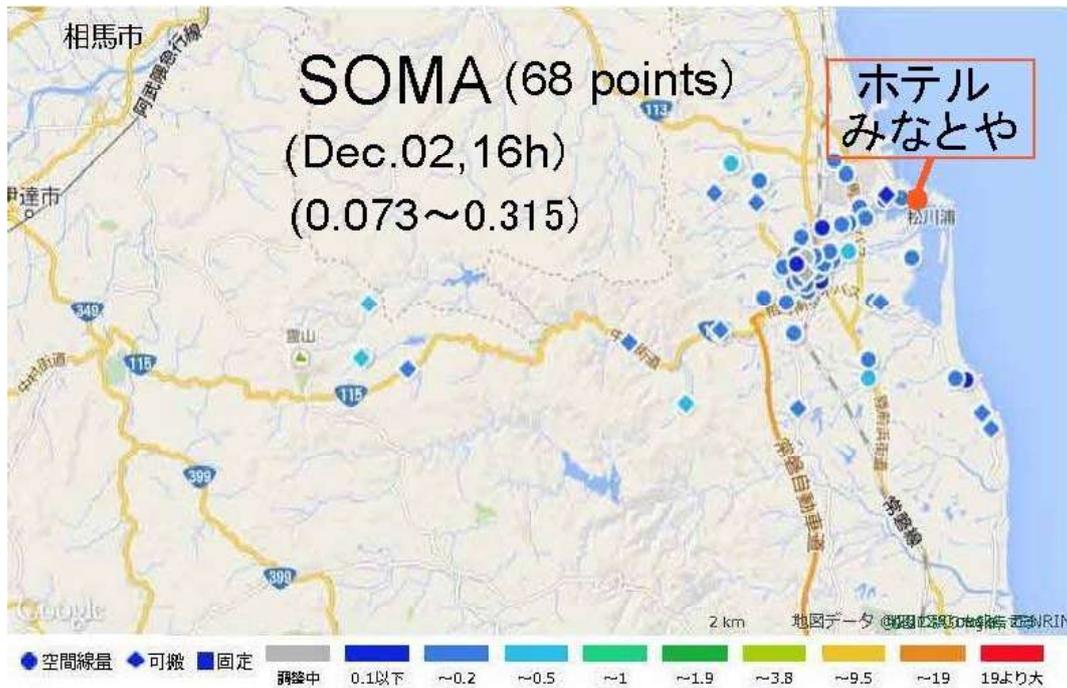


図6 相馬市のモニタリングポスト（68点）の分布。
(原子力規制委員会のホームページより転載)

4. 高線量地域における測定

11月26日の午後、双葉郡浪江町立野春卯野にある「希望の牧場ふくしま」を訪問した。この辺りの浪江町は立入禁止区域になっているが、牧場は南相馬市に隣接しているため、南相馬市側からアクセスすることができる。南相馬市小高地区から「希望の牧場ふくしま」に向かう途中にあるモニタリングポスト「川房公会堂」の11月25日～12月1日の1週間の線量の変動を図7に示しておく。

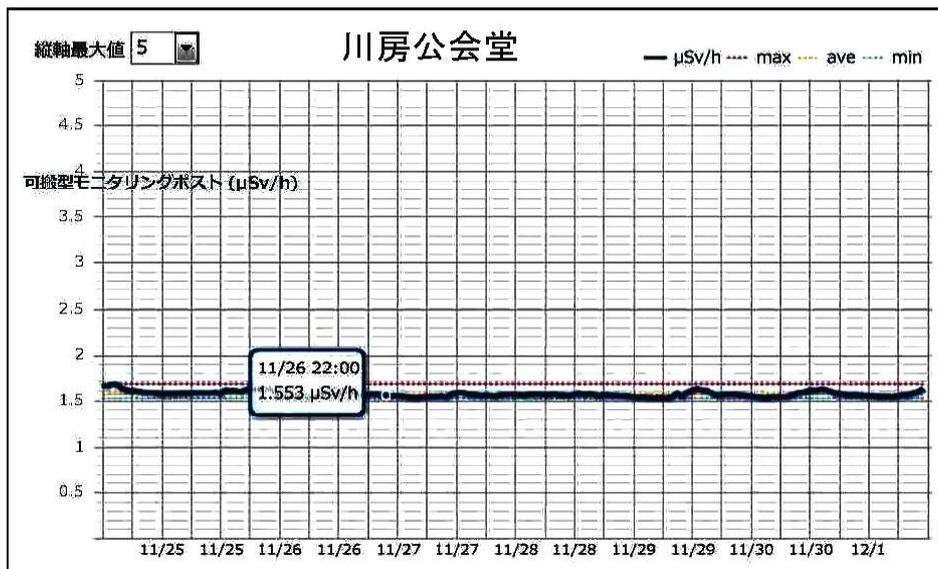


図7 川房公会堂（南相馬市）のモニタリングデータ（2013年11月25～12月1日）
(原子力規制委員会のホームページより転載)

福島第一原発から北西に 14km 離れたところにある 30 ヘクタールの広さのこの牧場は、吉澤正巳さんが経営しているが、「見捨てられた命があることを知っていますか？」というメッセージを伝えたいために、政府の屠殺処分をするようにという命令に反して、約 350 頭の売れなくなった牛の飼育を続けているという。

南相馬市小高地区から「希望の牧場ふくしま」に向かう途中のマイクロバスの車内で測定した線量値は次第に高くなり、 $0.282 \Rightarrow 0.408 \Rightarrow 0.910 \Rightarrow 1.115 \Rightarrow 1.253 \Rightarrow 1.526 \Rightarrow 1.655 \Rightarrow 1.125 \Rightarrow 1.158 \Rightarrow 1.443 \Rightarrow 1.796 \mu\text{Sv/h}$ と刻々と変化し、牧場に到着して車外で測った値は $2.312 \mu\text{Sv/h}$ であった。

そこで吉澤さんの説明を聞いているとき、近くの草の上の線量値を測ってみると $3.175 \mu\text{Sv/h}$ 、黒土の上で $4.210 \mu\text{Sv/h}$ という値を示した。福島県立小野高等学校平田校の千葉茂樹教諭らが行っている福島の放射性汚染の研究¹⁾によると、黒色で表面に亀甲状の亀裂がある土の上では高い線量値を示すそうだ。

測定値を野帳に書き込んでから吉澤さんの方に近づいていくと、「あ、その牛の糞を踏まないでください。線量値が高いですから！」と言われた。慌てて足を引っこめて、恐る恐る牛の糞の上に線量計近づけてみると、 $5.334 \mu\text{Sv/h}$ であった。これは年間で 46.7mSv に相当する。ここはとても普通の人間が住めるところではない。ここで暮らす彼が牛の尿を貯めるタンクに「決死、救命を、団結！」と書かれた言葉が、ずしんと心に響く。そのあとは「そして希望へ」と続くが、これは「そして絶望へ」という現実には一生懸命抗う彼の心の声であろう。国による棄民政策への強い怒りが伝わってくる。



図 8 ゆっくりと餌を食む「希望の牧場ふくしま」の牛 (2013 年 11 月 26 日)。

いまでこそ、見学者はのんびり餌を食む牛の姿 (図 8) を見渡すことができるが、2011 年 3 月 11 日の巨大地震 (M9.0) の直後は、地震により牧場内には何本も地割れが走り、

電気も停まって、牛の飲み水や食料を確保するのに吉澤さんは大変な苦勞をされたそうだ。牛に与える飼料は、1 回に 5 トン必要だという。自分が被曝するのは覚悟の上で、ほかの命を見捨てるわけにはいかないという思いから、牧場に留まっているとのことである。

11 月 27 日の午後にはもう 1 つの高線量地域である飯舘村を訪れた。飯舘村は、村のほとんどが福島第一原発から 30km 以上離れているので、この村は福島第一原発の設置の際に何も補償を受けなかったが、この地域が原発事故後に高濃度の放射能を含んだ大気が通り抜ける通路にあたったため、国は 2011 年 4 月 22 日に全村を計画的避難地域に指定した。それから村民の苦難の道が続く。2 年を目処ということで村外の仮設住宅に強制的に移住させられた住民は、未だに自宅に戻れる見通しが立っていない。図 9 に示すように、飯舘村はいまだにほとんどの地域で $1\mu\text{Sv/h}$ を超える線量値を示している。

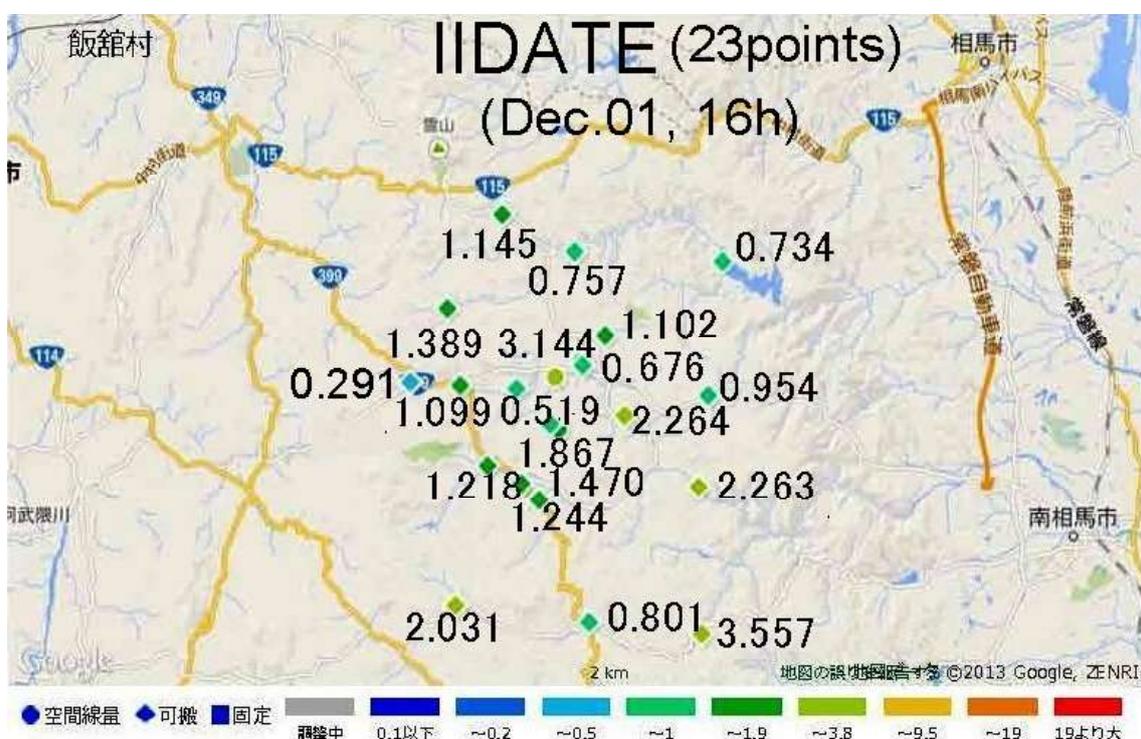


図 9 飯舘村のモニタリングポスト (23 点) の分布。
(原子力規制委員会のホームページより転載)

われわれは、南相馬市から県道 62 号線と国道 399 号線を経て、午後 3 時半頃に飯舘村役場に到着した。途中の車内で測った線量値は、 $0.751 \Rightarrow 0.495 \Rightarrow 0.892 \Rightarrow 0.940 \mu\text{Sv/h}$ と変化していった。途中で見かける家屋や学校等の公共施設は、震災による被害もそれほど致命的ではないようで、原発事故の放射能漏れさえなければ、今頃は震災前のつましい平凡な暮らしに戻れたのではないかと考えると心が痛む。

飯舘村役場の前には、図 10 に示すような線量表示パネルが立っていて、 $0.54 \mu\text{Sv/h}$ という値が示されていた(11 月 27 日 15 時 30 分)。その前でわれわれも測定してみたが、 $0.577 \mu\text{Sv/h}$ という値であった。その後、飯舘村の南の端の立ち入り禁止区域になっている長泥地域に向かった。車中で線量を測ると $0.706 \Rightarrow 0.631 \Rightarrow 0.863 \Rightarrow 1.242 \Rightarrow 1.364 \Rightarrow$



図10 飯舘村役場の前の線量表示パネル。

2.053=>2.712=>2.967=>3.150 μ Sv/h と変化していった。途中で1頭の野良犬に出会った。恨めしそうな目でこちらを見ている。われわれは当事者ではないが、犬に「すみません」と謝った。この辺りはイノシシも増えてきているという。また逃げ出したブタがイノシシと交配して生まれたイノブタもなかに混じっているとのことである。このような高い放射能レベルのなかで生きている野生動物に奇形が現れなければよいが、と思った。

琉球大学理学部の大瀧丈二准教授らは、日本に広く分布するヤマトシジミを2011年5月に福島県の7市町村で採取して調査を行った結果、「羽が小さい」、「目が陥没」という奇形

が全体の12%に達したという^{2)・3)}。しかも、これらの異常は、次世代に行くほど奇形率が上がることも確認されているようだ。

また、2012年8月16日の北海道新聞朝刊は、北海道大学大学院農学研究院の秋元信一教授らの研究チームが東京電力福島第一原発事故で計画的避難区域に指定されている福島県川俣町山木屋地区で、「アブラムシ」の一種である「ヨスジワタムシ」約200匹を採取し、個体や脱皮後の抜け殻の調査を行ったところ、約1割に足が壊死したり、触覚が欠損したりするなどの奇形が見られたと報道している。腹部が2つある個体もあったという。奇形の発生率は通常1%未満なので、秋元教授は「遺伝子レベルで突然変異を引き起こすような外的要因があったのは間違いない」と指摘している。

さらに、先に述べた千葉茂樹教諭らの研究¹⁾には、原発事故のあと、福島市及び周辺地域で小鳥がいなくなり、茎が地表を這うコモチマンネングサの葉の色が高放射線地域ほど緑色が消え黄色になったと書かれている。

原発事故による放射能汚染は、この地域の生物に大きな影響を与えているようだと思うながらマイクロバスに揺られていると、やがて長泥地区の立入禁止検問所に着いた(図11)。



図11 長泥地区の立入禁止検問所。



図12 検問所横の草の上の測定。

(左：9.999、右：11.59 μ Sv/h の表示)

若いガードマンが立っている検問所ゲートの前で線量計を手に持ち、約 1m の高さで計測してみると 3.918~4.100 μ Sv/h であった。試みにその横の草の上に線量計を置いてみると、数値がどんどん上がっていき、9.999 μ Sv/h まで測れる線量計がスケールアウトしてしまった。ここへ案内してくれた相双地方労働組合総連合・事務局長の渡辺勝義さんが持っていた線量計を隣に置いたところ 11.59 μ Sv/h を示した (図 12)。長居は無用と思ったが、ここに立っている若いガードマンが何時間くらい勤務しているのかが気になった。彼に聞いて見ると、基本的に 2 人勤務で、1 人はゲートの前に立ち、1 人は近くにある工所用簡易ハウスのなかで休息し、12 時間ここにいるという。若い人をこんな現場で働かせてよいのかと、ちょっと心配になった。

放射能の心配さえなければ、たまにはイノシシやノウサギも遊びに来てくれるだろうし、静かにものを考えるにはよいところかも知れない。しかし、近くに出てくるキノコを採って帰るわけにもいかず、木の実も拾えないとなると、間接被曝の将来の影響が気になって、心は穏やかでないと思う。

このほか、われわれは全村避難の浪江町にも立ち寄ることを希望したが、何らかの理由により立入許可が下りなかった。図 13 に示すように、浪江町は 10 μ Sv/h を超えるところが多く、小丸多目的集会所のように 20 μ Sv/h に近いモニタリングポストもある。浪江町に再び人が住めるようになるのはいつのことであろうか。

「避難基準」などは、「年間被曝線量」で示されており、一般公衆被曝限度は、年間 1mSv (すなわち、1 時間当たり 0.11 μ Sv) である。ウクライナの強制移住基準は年間 5mSv (= 0.57 μ Sv/h) だそうだが、福島帰還基準は年間 20mSv (= 2.28 μ Sv/h) だという。これで本当に大丈夫なのであろうか。

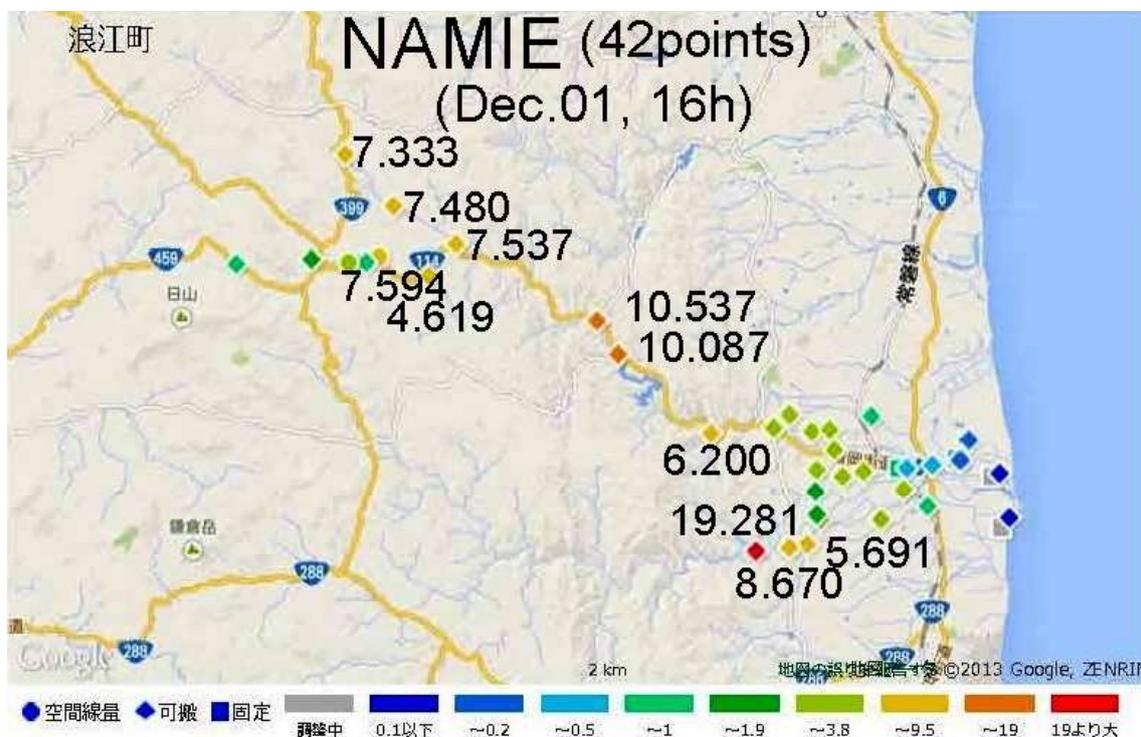


図 13 浪江町のモニタリングポスト (42 点) の分布。
(原子力規制委員会のホームページより転載)

5. おわりに

地震などの自然災害であれば、先人の知恵に学び、対策を講じて復興に向かうことも可能であるが、福島の場合、これに原発事故の放射能漏れという先例のない人為的災害が加わったことにより、問題解決をややこしくしている。

原発事故後の福島の現状について、活字や映像を通じて理解していると思っていたが、実際に現地を訪れ、自分の目で見て、耳で聞くと、全然状況は違っていた。政府は巨額の復興予算を組み、被災者への十分な手当てが行き届いていると思っていたが、現地の被災者の不満は大きい。それは、実際に現場で予算を扱う「お役人」が、依然として先例主義、事無かれ主義であり、被災者の望むところが理解できていないということが、今回のツアーでよくわかった。このような未曾有の災害に直面して、国民全体が先例にとらわれずに解決策を模索していかなければならない。事故後、2年半経っているのに、とても事態が収束しているとは言いがたい。

福島第一原発事故の被災者が望む解決の方向を、国を挙げて支援するとともに、地震国ニッポンにおいては福島第一原発の事故が特殊な例ではなく、国内の全ての原発が同様の事故を引き起こす可能性をもっていることを正しく認識し、全ての原発を廃炉にすることを決めなければならないと考える。

草木国土悉皆成仏とか山川草木悉有佛性というように「みんな生きているんだ、だから尊いのだ」ということで、地球生命の存続のために全ての原発を廃炉にしよう。

これが京都から線量計を持参して今回の福島ツアーに参加したわれわれの結論である。

謝辞

今回の福島ツアーで、中島孝、新妻慎一、村松孝一、村松えみこ、志賀勝明、吉澤正巳、渡辺勝義の皆さんには大変お世話になりました。ここに厚く御礼を申し上げます。

参考文献

- 1) 千葉茂樹・諏訪兼位・鈴木和博(2013)：福島県の放射性汚染土壌—とくに黒い物質—の野外の産状について，名古屋大学加速器質量分析計業績報告書（XXIV），名古屋大学年代測定総合研究センター，77-96.
- 2) A.Hiyama, Nohara, C., Taira, W., Kinjo, S., Iwata M., and Otaki, J. M. (2013) : The Fukushima nuclear accident and the pale grass blue butterfly: evaluating biological effects of long-term low-dose exposures, BMC Evolutionary Biology, 13:168 (<http://www.biomedcentral.com/1471-2148/13/168>)
- 3) 大瀧丈二(2013)：原発事故の生物への影響をチョウで調査する，科学，岩波書店，第83巻，9月号，1037～1044.

付表 線量測定値（2013年11月21～28日）（単位：μSv/h）

測定者：亀井成美・竹本修三

使用計器：堀場製作所製線量計Radi PA 1000

製品番号 HGG No.W7B62Y1Y

● 事前測定

2013年11月21日(木)		
① 城陽市深谷第2児童公園		
10:04~10:08(うす曇り)		
(1)コンクリートベンチ上(40cm)	0.043	
同横(1m)	0.055	
同上(10cm)	0.050	
(2)水道横(1m)	0.066	
同上(10cm)	0.066	
(3)水たまり(10cm)	0.050	
(4)砂場(10cm)	0.053	
②府道久津川交差点(城陽市)		
10:19~10:22(うす曇り)		
(1)交差点角から30m(1m)	0.064	
同上(10cm)	0.074	
(2)交差点角から3m(1m)	0.064	
同上(10cm)	0.073	
2013年11月23日(土)		
①府道久津川交差点(城陽市)		
14:18~14:22(うす曇り)		
(1)交差点角から30m(1m)	0.062	
同上(10cm)	0.063	
(2)角から3m(1m。ブロックの上)	0.051	
②大久保駅東側		
15:12~5:15(うす曇り)		
(1)タクシー乗り場の前(1m)	0.060	
同上(10cm)	0.050	

● 京都から福島へ

2013年11月25日(月)		
21:32~21:50(雨のち曇)		
①京都駅八条口高速バス乗場		
(1)階段下最初の柱付近(1m)	0.086	0.092
同上(10cm)	0.091	0.086
(2)バス駐車場の端(1m)	0.082	
同上(10cm)	0.090	
23:10(曇)②土山サービスエリア		
トイレ前(1m)	0.068	0.075
同上(10cm)	0.080	
停車中のバスの中	0.040	0.029
2013年11月26日(火)		
07:02(晴)③西郷バス停(10cm)	0.266	
07:28(晴)④須賀川駅前(1m)	0.108	
08:10(晴)⑤郡山駅前(1m)	0.121	

郡山駅新幹線ホーム(1m)	0.124	
---------------	-------	--

● 福島駅から相馬市へ

09:08(晴)		
①福島駅東口万世大路バス停(1m)	0.681	0.679
09:48(晴)		
②道の駅川俣トイレ前(1m)	0.299	0.285
同上(10cm)	0.350	0.342
11:10(晴)		
③原ノ町駅前(1m)	0.222	
同上(10cm)	0.342	0.340
11:25~12:00(晴)		
④道の駅南相馬トイレ前(1m)	0.267	0.223
同上(10cm)	0.273	
食堂テーブルの上	0.090	
12:30(晴)		
⑤南相馬市小高地区(1m)	0.103	
同上(10cm)(津波被害甚大)	0.162	
12:42(晴)		
⑥小高地区海岸付近(1m)	0.185	0.122
同上(10cm)	0.130	
13:00~(晴)		
⑦希望の牧場へ向かう車中	0.282	
"	0.408	
"	0.910	
"	1.115	
"	1.253	
"	1.526	
"	1.655	
"	1.125	
"	1.158	
"	1.443	
"	1.796	
13:47~(晴)		
⑧希望の牧場(浪江町)(1m)	2.312	
車中	2.500	
"	2.620	
草の上	3.175	
黒土の上	4.210	
牛の糞の上	5.334	
14:30~(晴)		
⑨小高地区旧商店街(1)(1m)	0.203	
小高地区旧商店街(2)(1m)	1.596	

15:00		
車中	0.080	
15:15		
⑩道の駅南相馬トイレ前 (1m)	0.237	

● 相双地区から福島へ

2013年11月27日(水)		
06:17~06:45(うす曇り)		
①松川浦ホテルみなとや前(1m)	0.097	0.103
同上(10cm)	0.108	0.107
海岸岩の上(1m)	0.056	
10:10(うす曇り)		
②相馬港魚市場(室内)	0.074	
11:20(うす曇り)		
③飯舘村避難住宅(1m)	0.087	
(在相馬市大野台) 同上(10cm)	0.090	
11:42(晴)		
④農民連事務所(1m)	0.082	0.076
(相馬市石上字南白髭320)		
13:12~14:30(晴)		
⑤ひまわりの家前(南相馬市)(1m)	0.159	0.139
同上(10cm)	0.165	
室内	0.084	
14:38~16:20(うす曇り)		
⑥飯舘村		
(1)車中	0.751	
“(飯舘村公民館近く)	0.495	
“	0.892	
“	0.940	
(2)飯舘村役場前(1m)	0.240	0.444
線量表示パネルの前(1m)	0.577	
(3)車中	0.706	
“(国道399号線上)	0.631	
“	0.863	
“	1.242	
“	1.364	
“	2.053	
“	2.712	
“	2.967	
“	3.150	
(4)長泥地区立入禁止検問所(1m)	3.918	4.100
同所草の上(オーバースケール)	$4\mu\text{S} \Rightarrow 10\mu\text{S}$	
17:05		
⑦道の駅川俣トイレ前(1m)	0.236	0.245

道の駅川俣トイレ前(10cm)	0.328	0.371
同上(10cm)	0.463	0.424

● 福島から京都へ

17:51 福島駅東口(1m)	0.183	
17:51 同上(1m)	0.183	
20:00 福島バス停(1m)	0.119	
20:30 二本松バス停(1m)	0.387	
20:45 車中	0.201	
21:00 郡山駅バス停(1m)	0.117	0.138
21:15 車中	0.094	
21:30 “	0.083	
21:35 “	0.057	
21:45 “	0.058	
22:00 “	0.115	
22:30 “	0.066	
22:50 須賀川サピシア(1m)	0.064	
22:51 車中	0.033	
06:05 “	0.040	
06:15 “	0.040	0.060

● 事後測定

2013年11月28日(水)		
06:22		
①京都駅八条口バス乗場(1m)	0.076	0.084
同上(10cm)	0.082	0.094
07:03		
②大久保駅東側		
(1)タクシー乗り場の柱の前(1m)	0.055	
同上(10cm)	0.053	
10:04~10:08(うす曇り)		
①城陽市深谷第2児童公園		
(1)コンクリートベンチ上(40cm)	0.045	
同横(1m)	0.048	
同上(10cm)	0.056	
(2)水道横(1m)	0.058	
同上(10cm)	0.082	
(3)砂場(1m)	0.042	
同上(10cm)	0.046	
10:19~10:22(うす曇り)		
②府道久津川交差点		
(1)角から30m(1m)	0.056	
同上(10cm)	0.063	
(2)角から3m(1m)	0.055	
同上(10cm)	0.082	